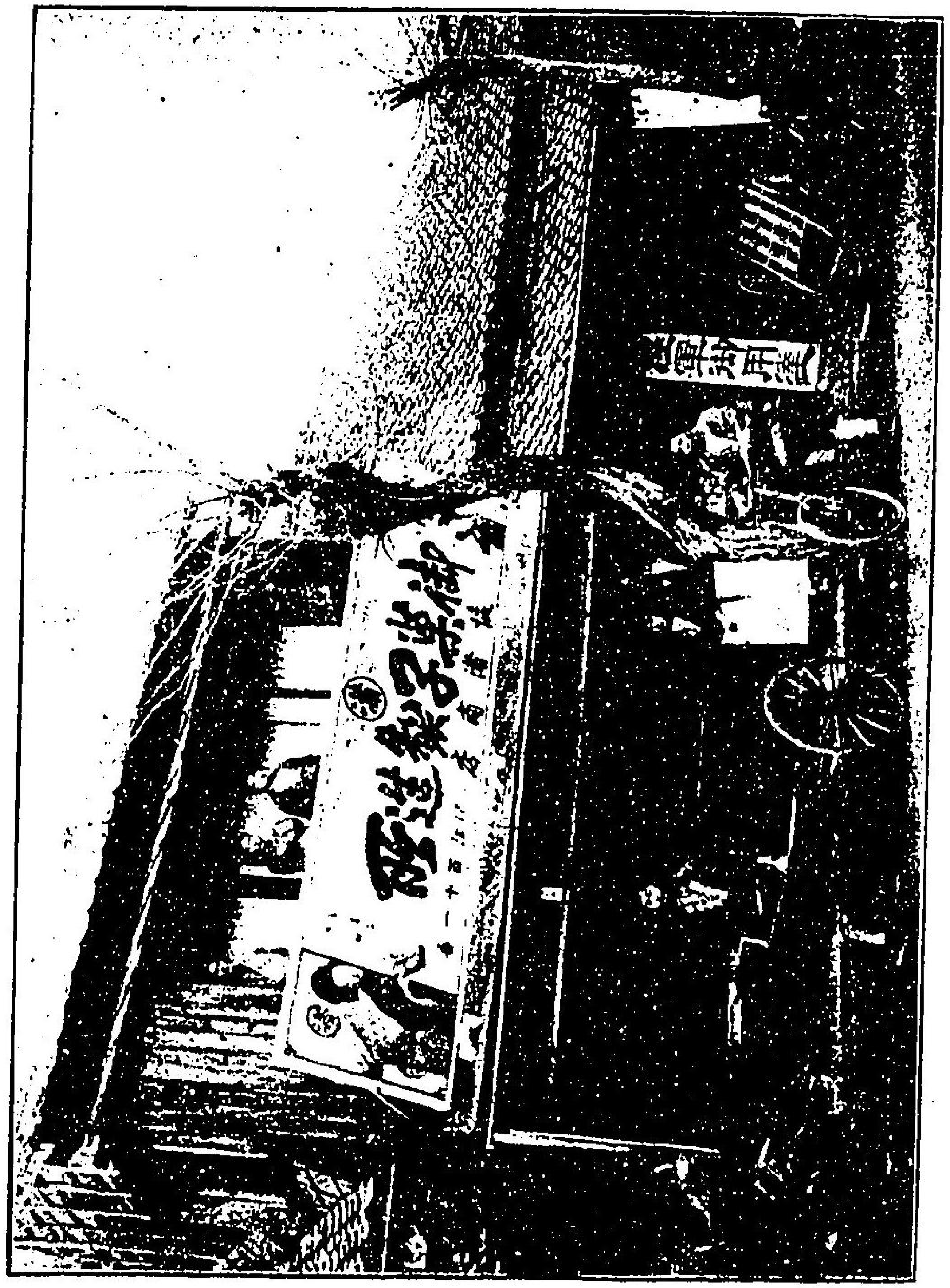
御菓子製造所

都城上町

陸軍御用達 （満） 鹽満仁之助商店

（電話百十一番）



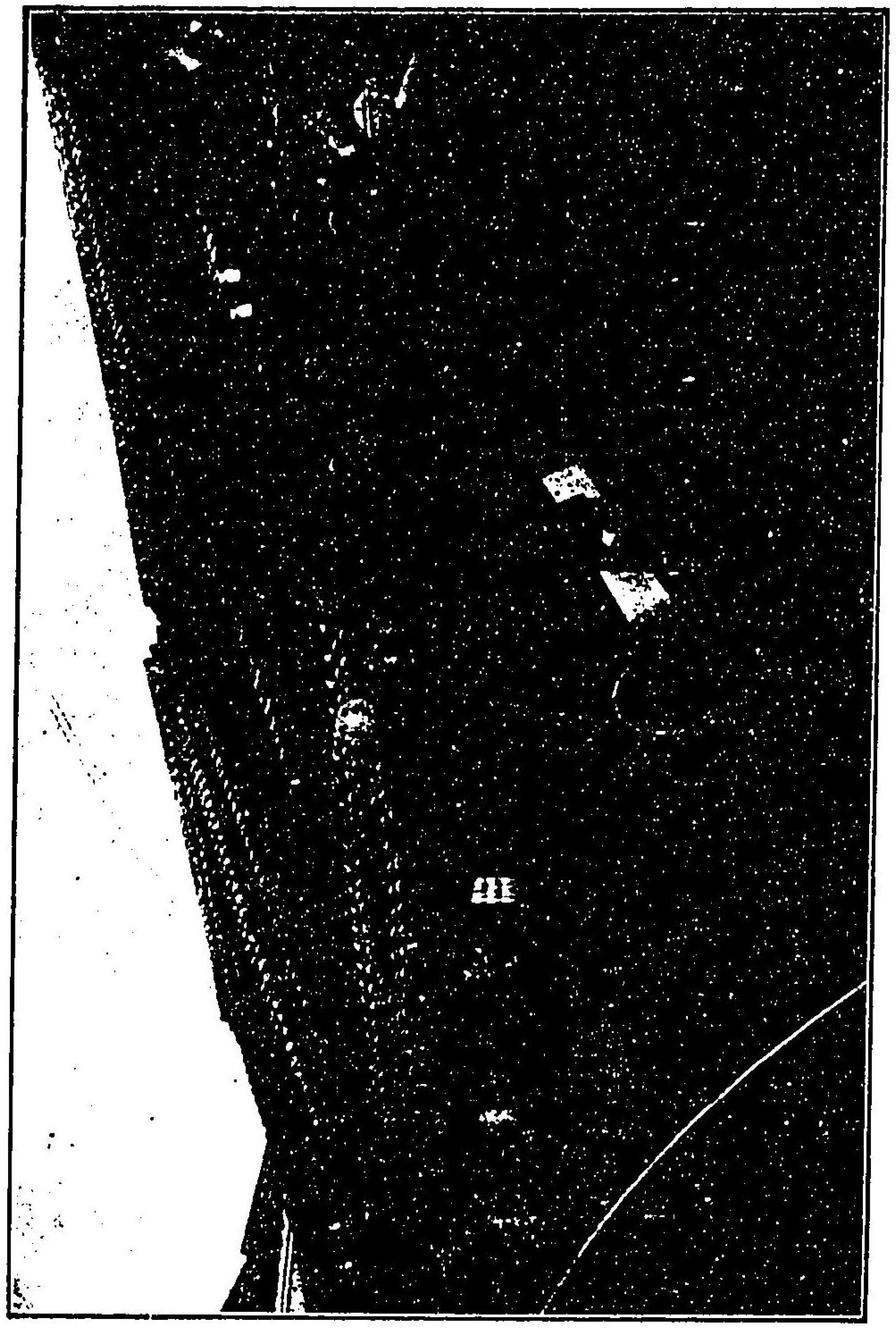
米穀並ニ備後表其他

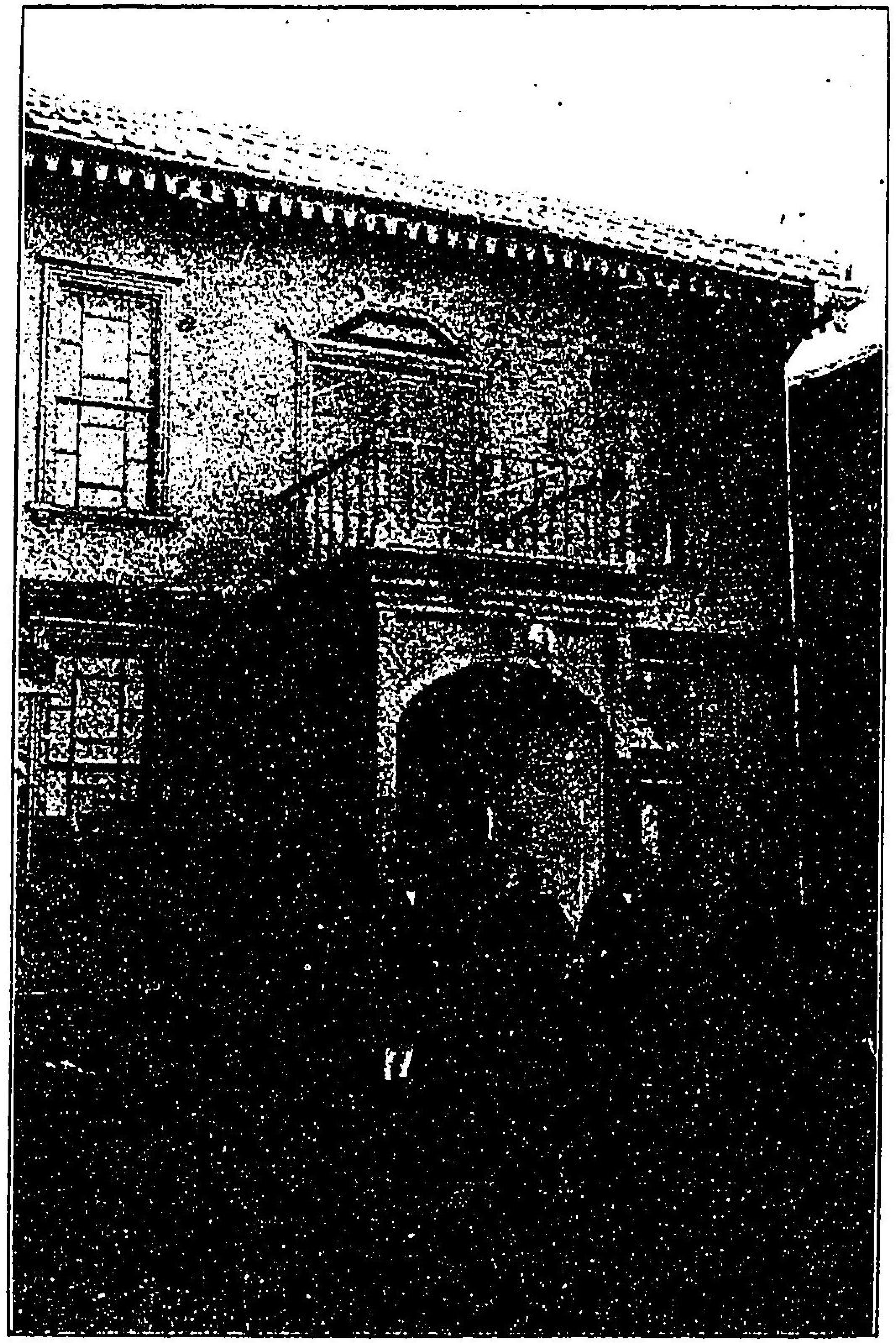
各島疊表卸小賣商

都城上町

南崎十藏

電話一二二番



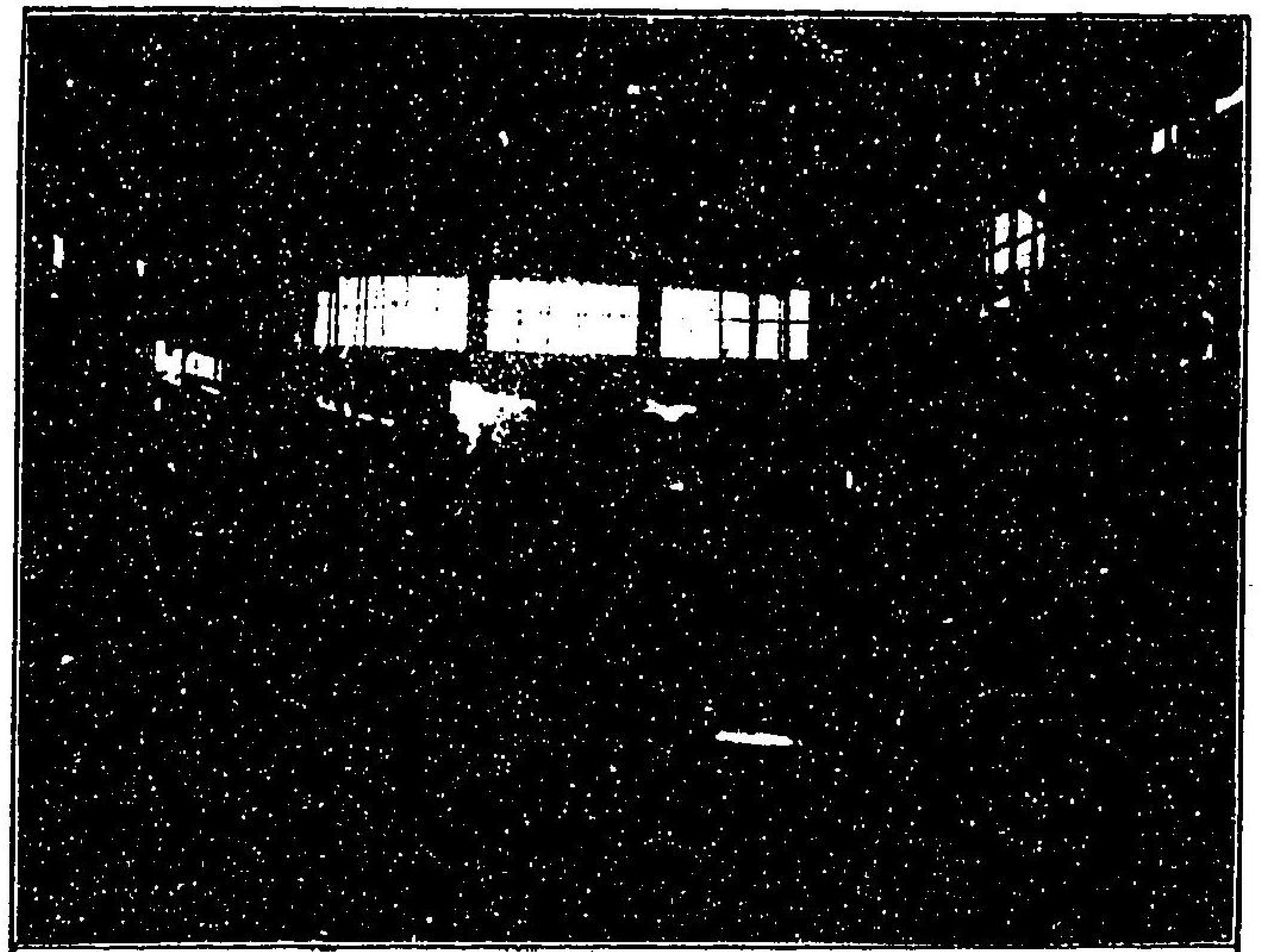


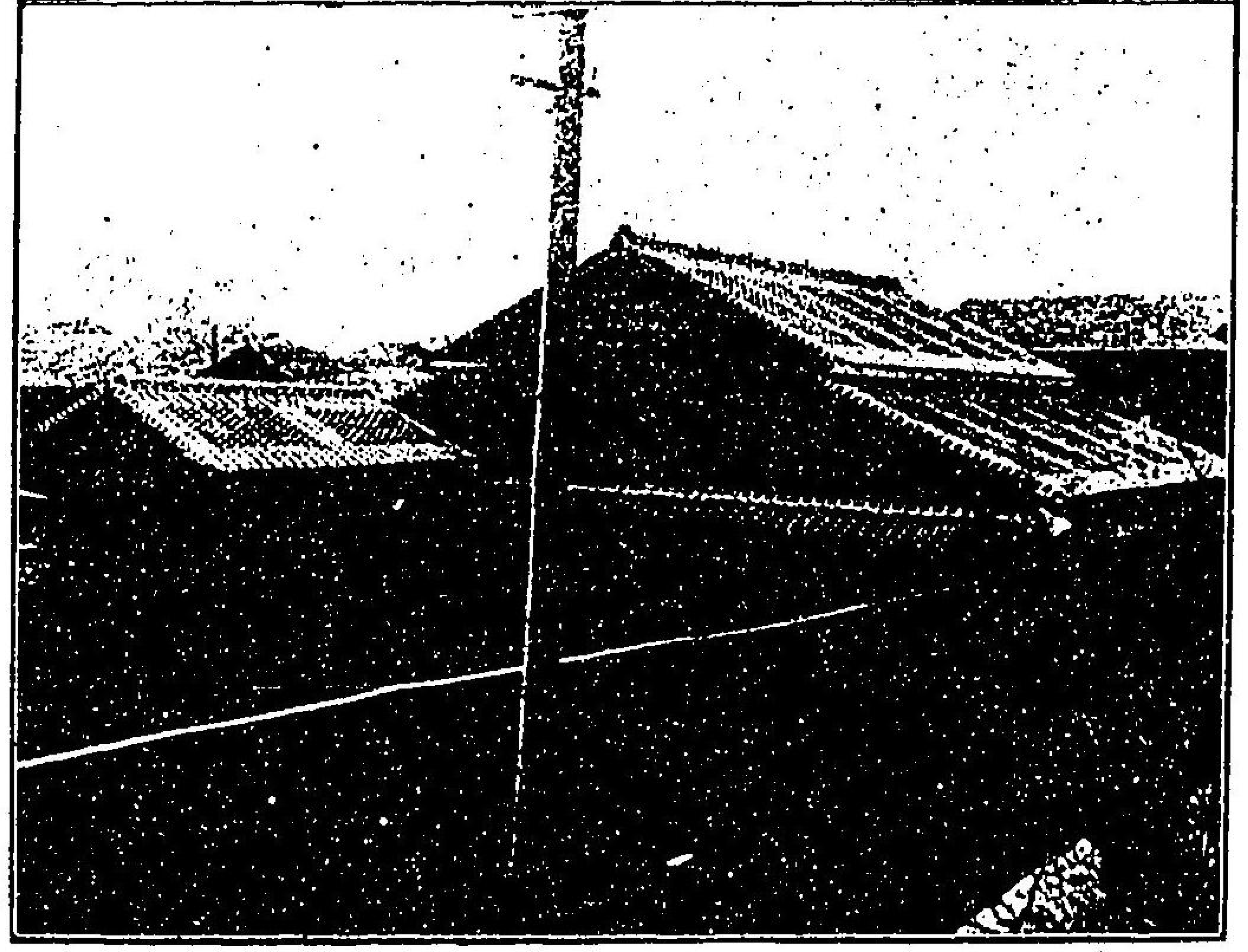
都城池小路

宮谷兩替店

電話百三四番

谷山工場





都城池ノ小路

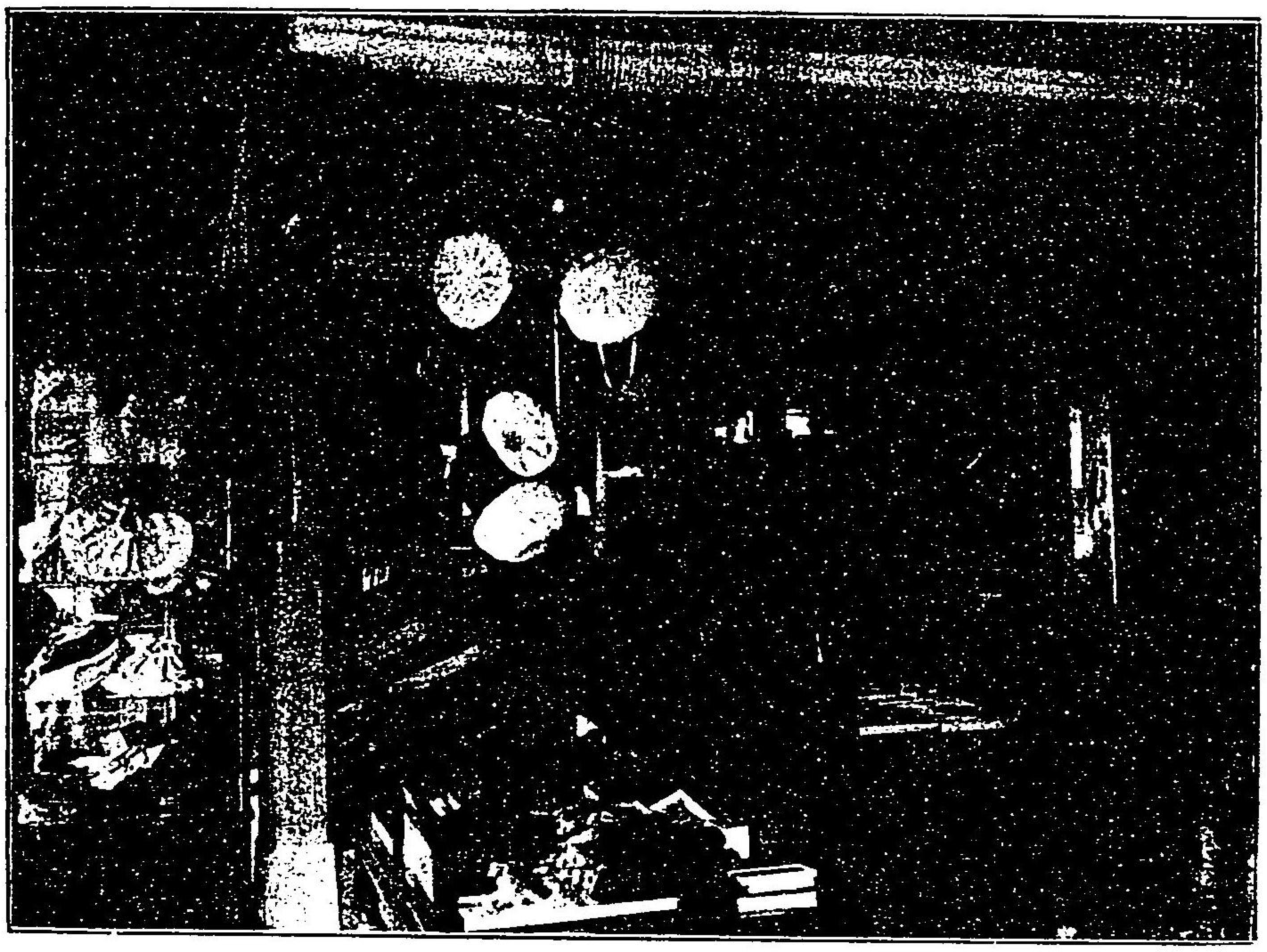
製糸業　谷山忠次

電話三〇番

和洋紙並ニ文房具商

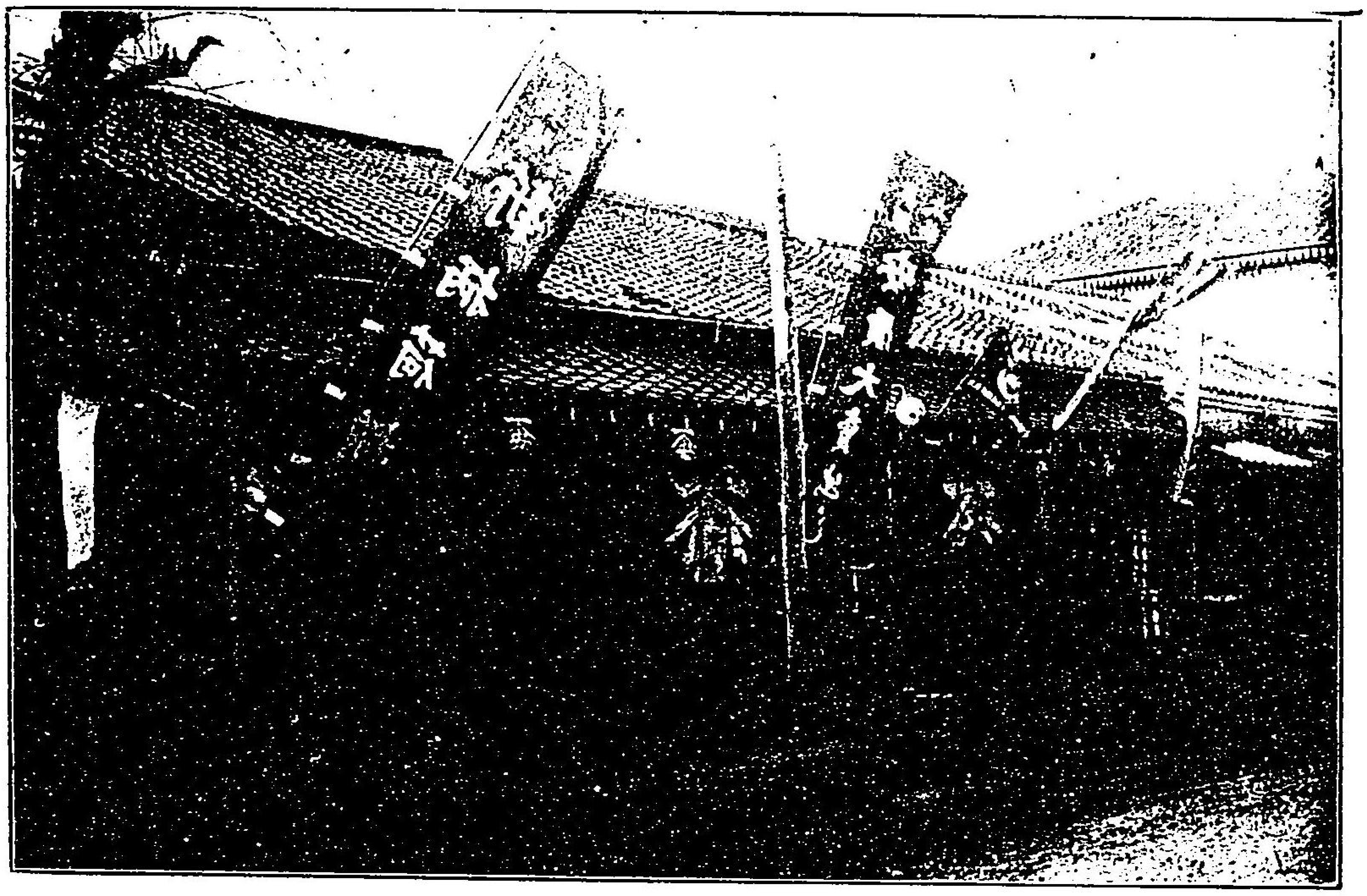
都城上町 ⺅叶 高野茂吉 電話二九番

和洋雑貨 全町 ⺅叶 高野雑貨部支店



都城上町

伊之助屋事 安樂呉服店 電話一二番

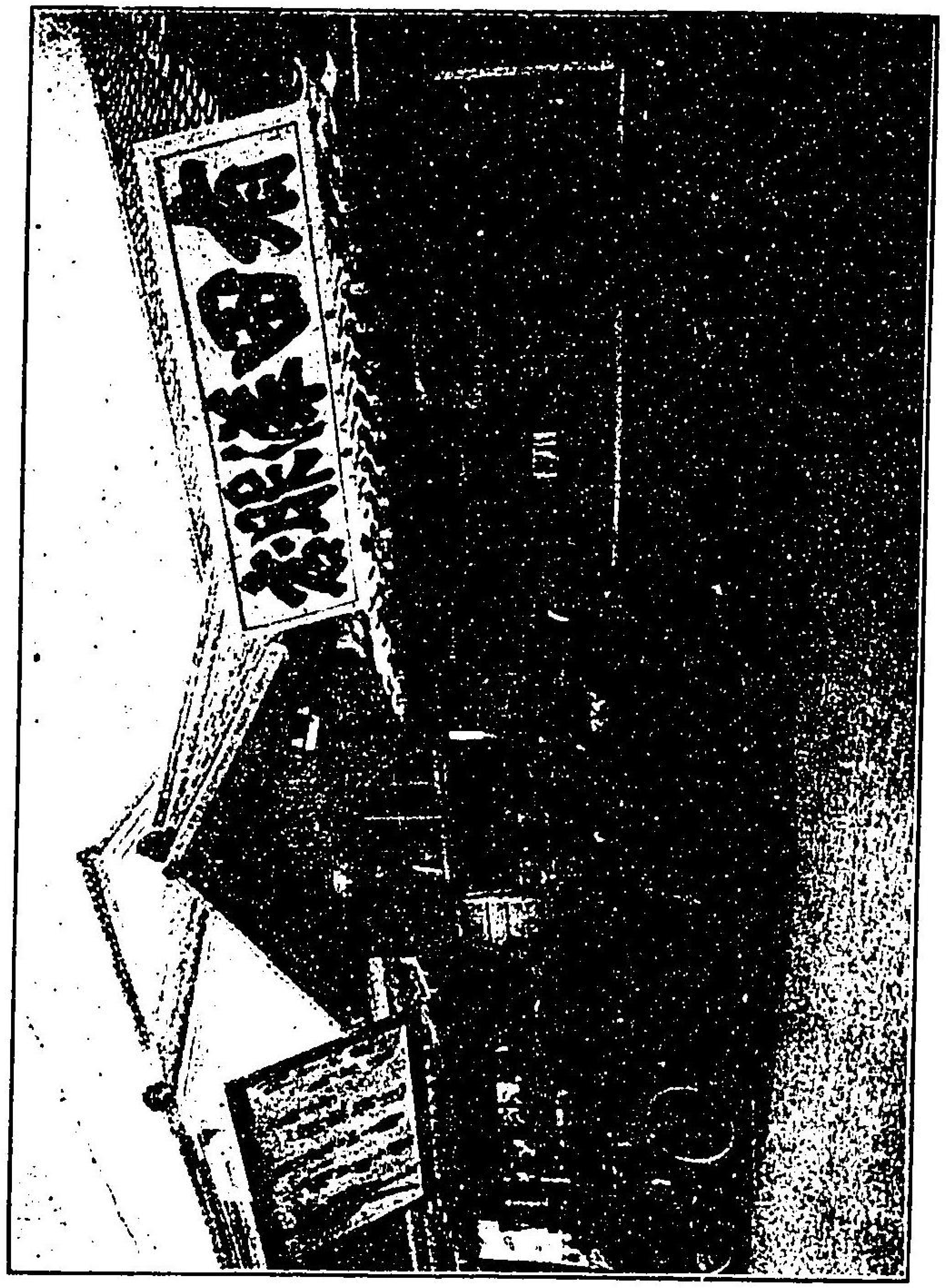


最新流行

都城上町

有田洋服店

電話三八番

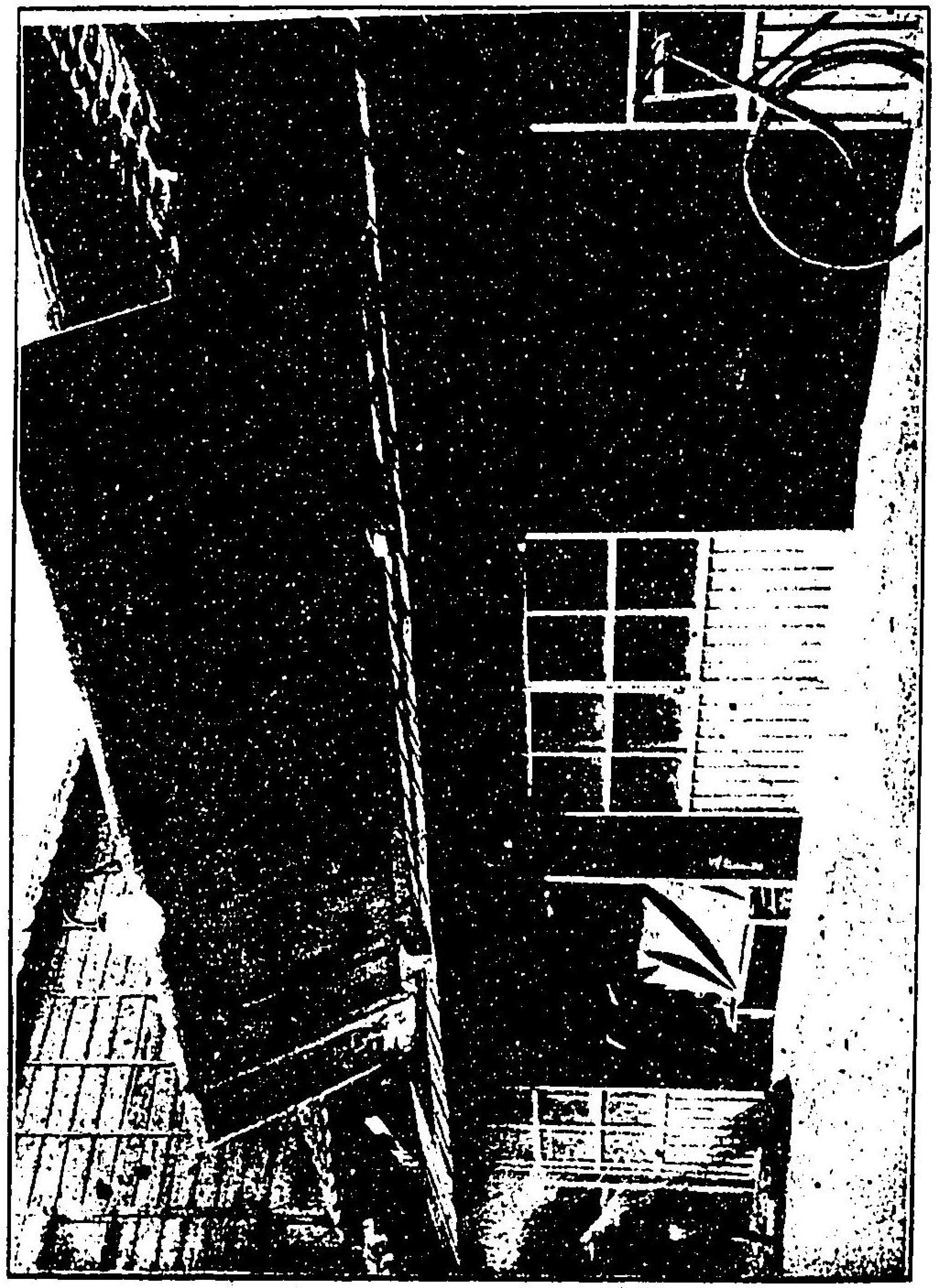


嶄新流行 高等洋服調進所

都城東上町

菊野藤太郎商店

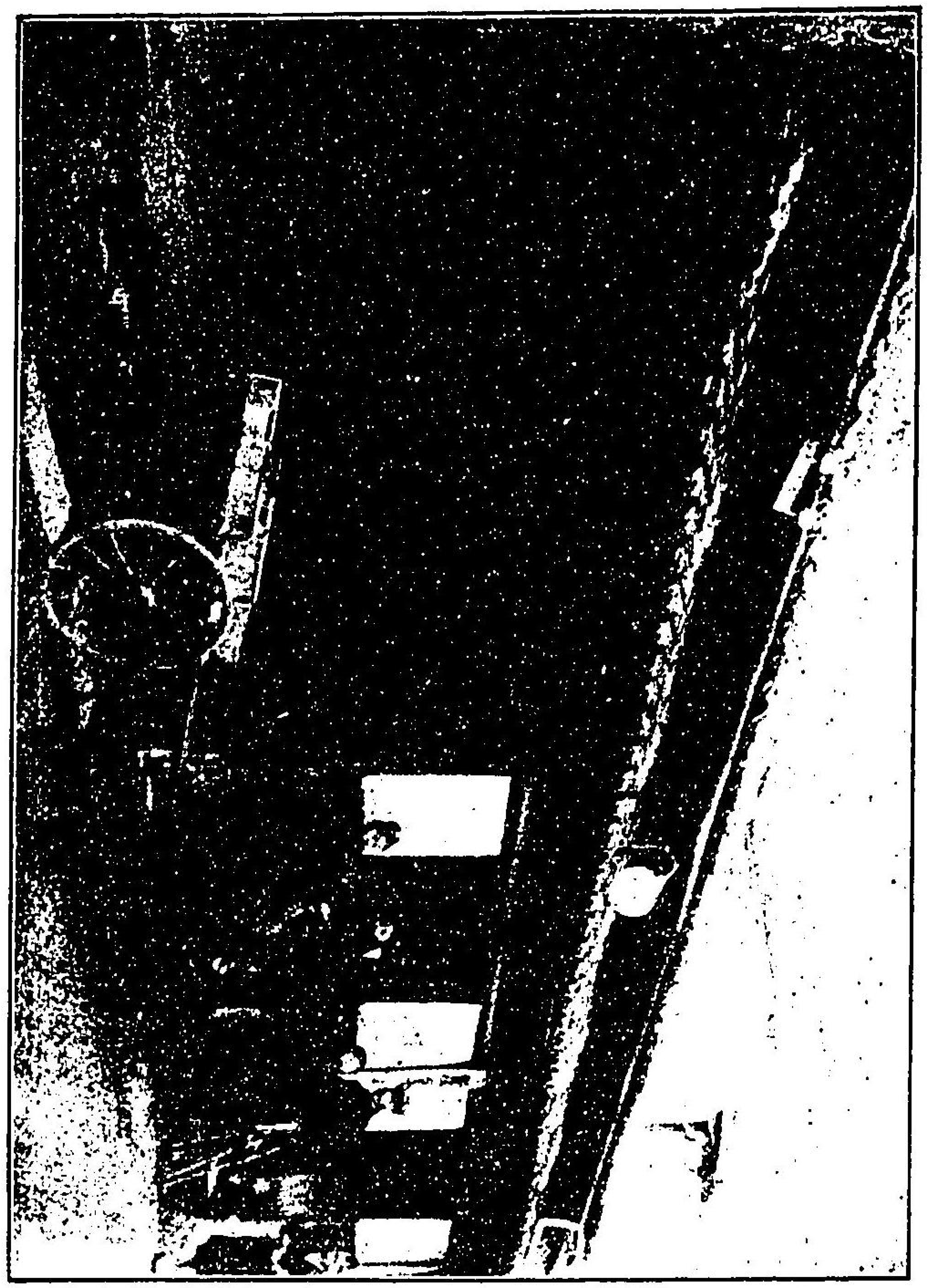
電略(キク)號



洋服店

店主
中川竹次郎
都城上町

石鹸製造所



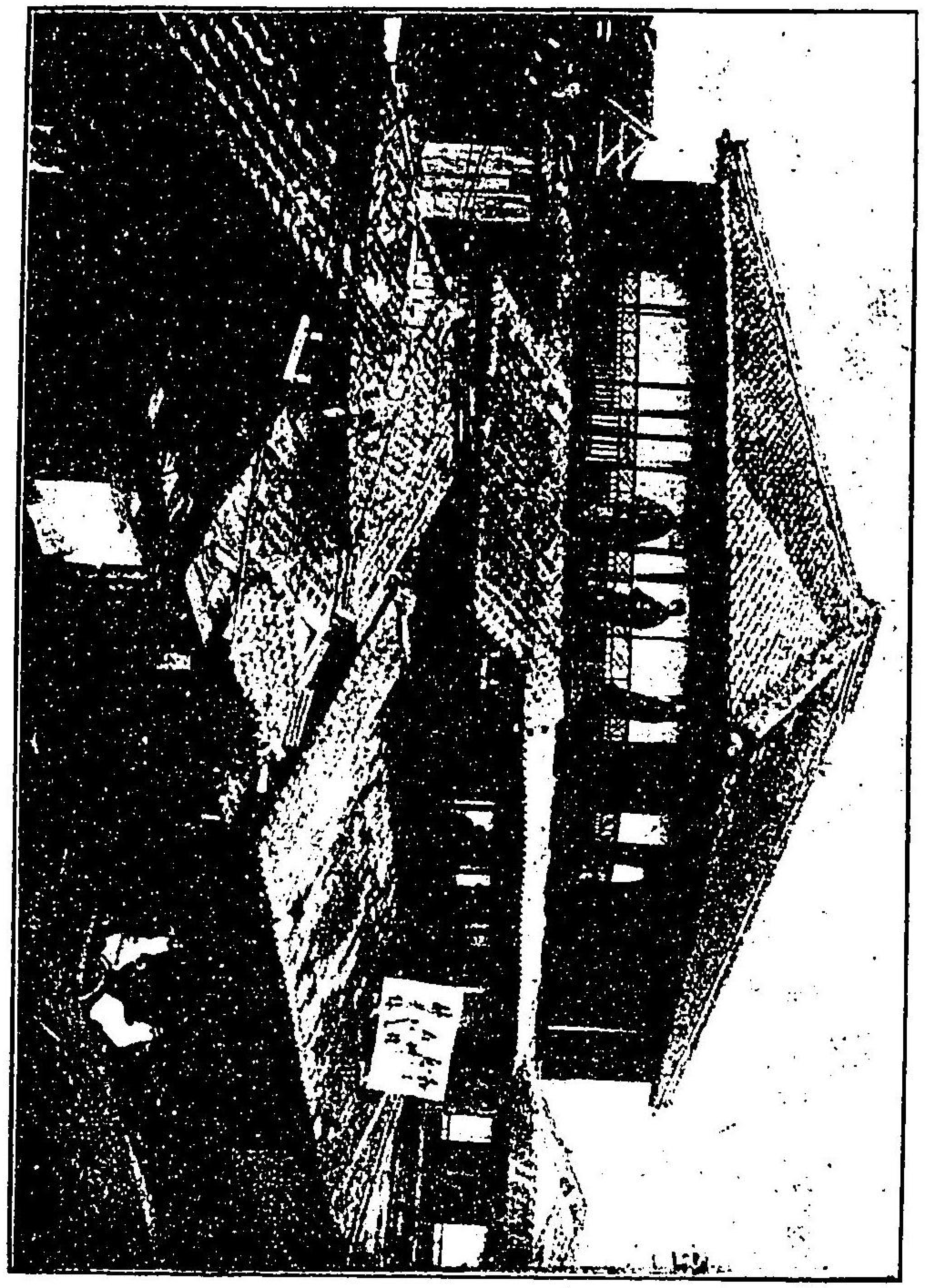
都城東新道
龜甲屋 白男川熊太郎

和洋御料理
會席仕出し

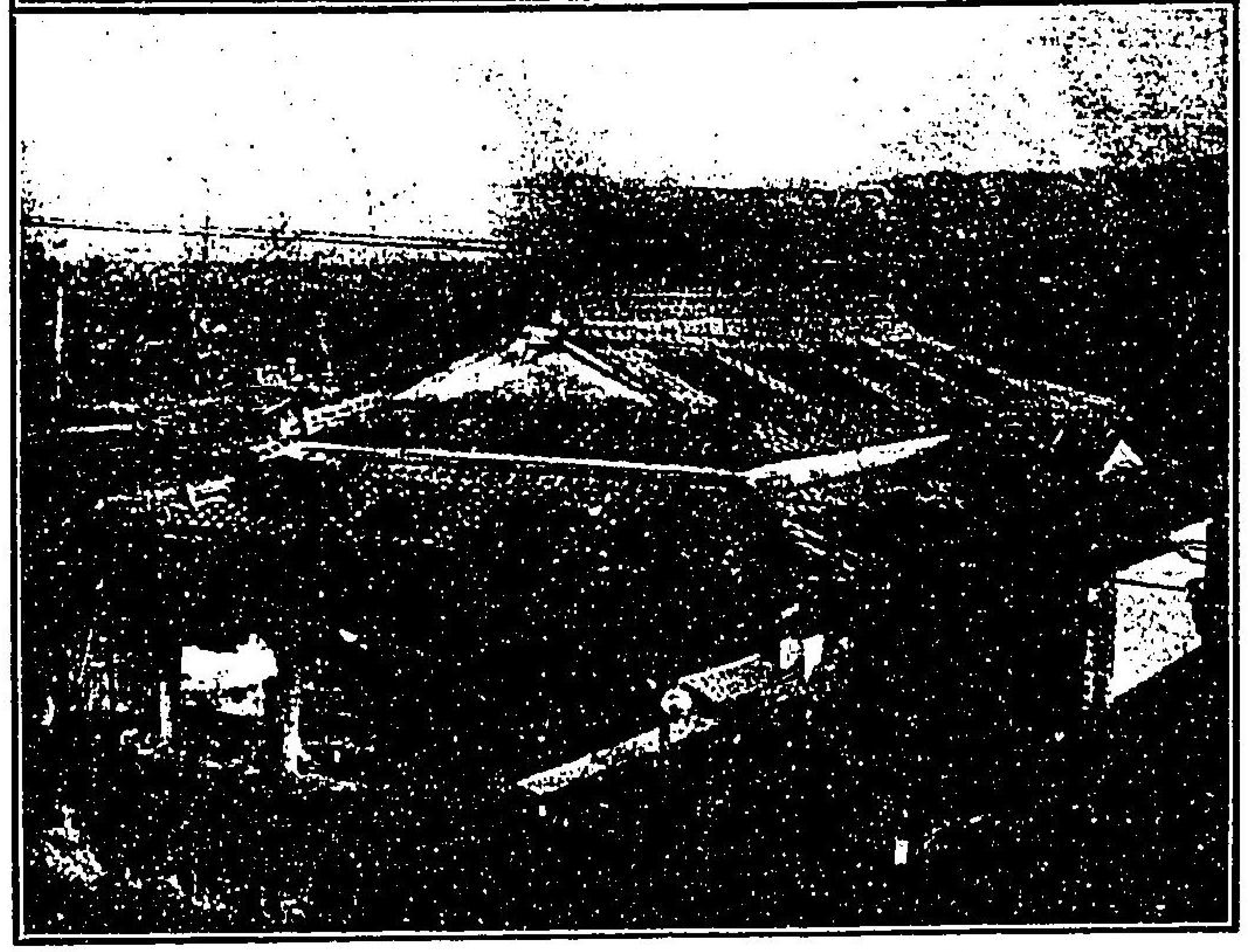
都城町字牟田小路

竹葉樓

電話一四一番



都城町字下町 永井一家



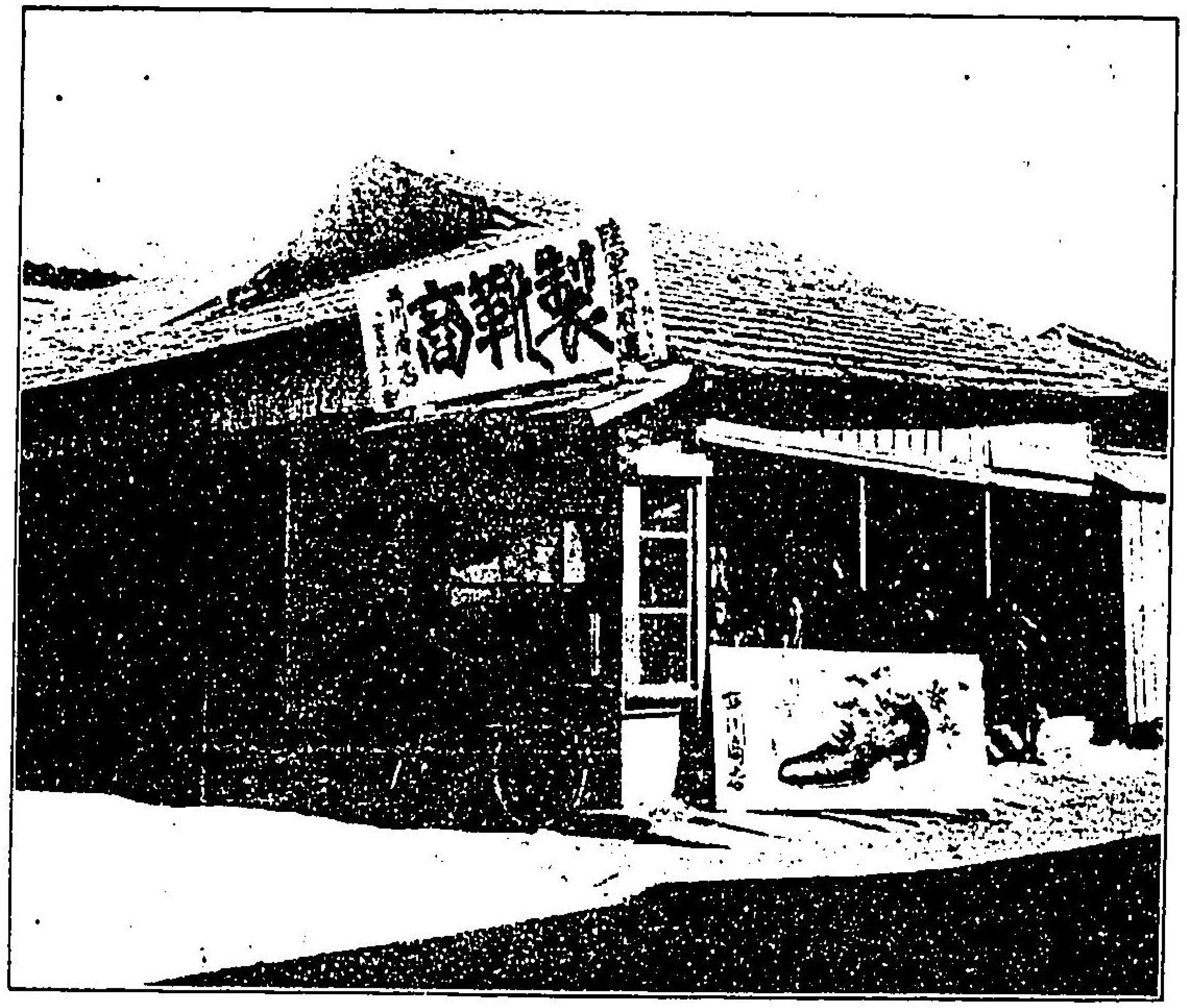
産科、婦人科、小兒科

永井醫院

院主 永井資敏 電話一〇二番

製靴業

大勉強

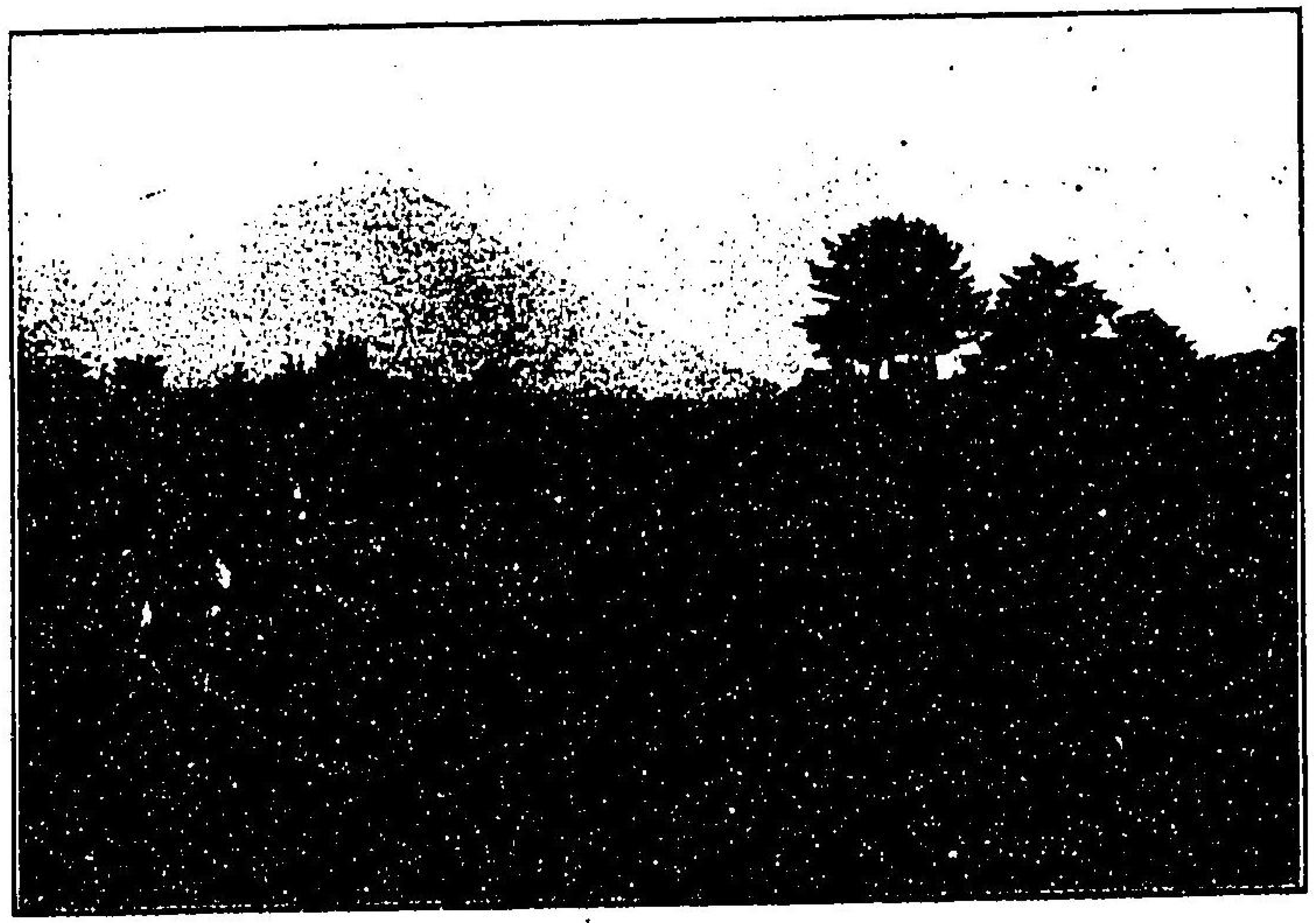


陸軍御用達

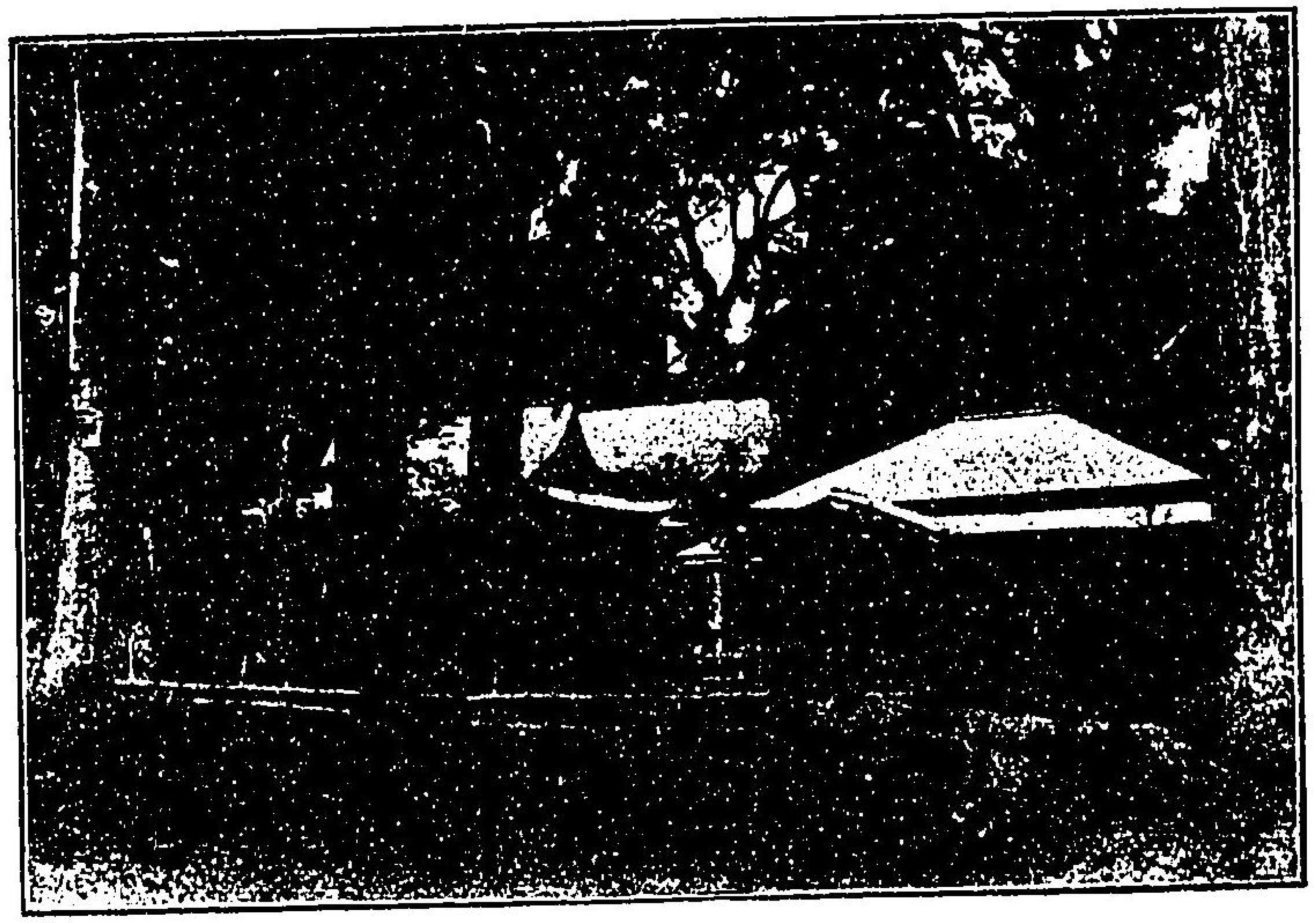
都城池ノ小路

西川清太郎

電話三三番



神武天皇御降誕地(其一)皇子原



神武天皇御降誕地(其二)狹野神社

小林細野　景行天皇御腰掛石

西諸縣郡小林村　陰陽石

附錄

小林地方記

【總說】小林村は西諸縣郡の主都にして、縣の西部に位し、熊本縣及び鹿兒島縣の北部より宮崎並に都城に通ずる要路を扼し、郡內樞要の地、郡役所、警察署、郵便電信局、稅務署、小林區署、日州銀行支店等あり、都城を距る九里餘、宮崎を距る十三里二十五丁、其面積は全郡五十六方里の中十七方里五を有し、人戶二千七百六十五、人口一萬七千三百七十二、西に霧島及び脈絡せる六觀嶽の高嶺を仰ぎ、北に國見山の連峰あり、此地方稻田多く小林米と稱して縣下第一の名あり其他山產物多く、人情質實にして、能く精力に富む、米、木材、茶等は重なる產物なるも、農家の副業として畜產養蠶等も亦大に見るべきものあり、今本村の一ヶ年比例產米を算するに三萬七千石にして、其內他に輸出するもの一萬三千石、而して本村が霧島の東麓に存する森林は多大にして、樹木多くは杉なり、樽丸の製材は近年此地の產物たるもの丶如し、古來より熊本に通ずる宿驛となり又郡內貨物集散の中樞地となす、人馬絡繹として絕ゆることなく、之れが需要供給を介し、軒端相連ね賈を營み、小林町と稱するもの實に五百戶の多きを占む、今や鐵道の工事着々として竣成を告げ開通旦夕

にあり、當地の殷賑期して待つべきなり。

【雛守獄と腰掛石】 小林村字細野にあり、昔景行天皇西征の時、此山より炊煙の上るを見で、雛守兄弟をして窺はしめ給ひしに、和泉姫といへる者帝を迎へ奉りて宴を張らむとする由、奏上しければ、帝直に御臨幸ありて姫を喜び、淹留し給ふこと一年に及びぬ、山麓に天皇の腰掛石あり里人柵を設け今猶之を守る。

【陰陽石】 當村大鼓橋の上三町餘の處にあり、陽石高さ二丈四尺周圍九間餘根址二十七間、岩瀬川の上流にあり、其左右は深潭をなし、急流相激す、陰石は之に對して川の北岸にあり周圍三十餘間あり。

【伊東塚】 は小林町の北端より東に折れて凡そ五丁、眞方村上馬場の西隅老松龍狀せる古木の下にあり、元龜三年壬申五月四日、島津、伊東、兩氏、木崎原の合戰に戰死せし、伊東氏の族臣を葬る、其重なるは伊東加賀守、同二郎、同新二郎、稻津又三郎、上別府宮内少輔、米良筑後守、同喜右助、同式部少輔、野村西郎左衛門等總勢二百廿餘人、久しく林藪の裡に荒れ果てしが、近頃小林町の有志義捐金を募りて祀祭する事となりぬ。

【[illegible]餅田古戰場】 小林村北西方にあり、伊東氏の驍將、柚木崎丹後守は、日向第一の槍の名手、元龜三年五月飯野川の役に島津義弘を附け狙ひて、薩軍に紛れ入り、槍を揮つて衝

き懸りしに、義弘の馬驚きて前膝を折りし爲め、照準違ひ兜の眞向を衝きて果さず、却つて戰死せり、此時義弘の馬は牝馬なりしも、無双の駿にして後膝つき栗毛と稱し、八十餘歳まで生存せしとぞ、丹後守の槍の痕ある兜は今猶島津家の寶物として傳はる。

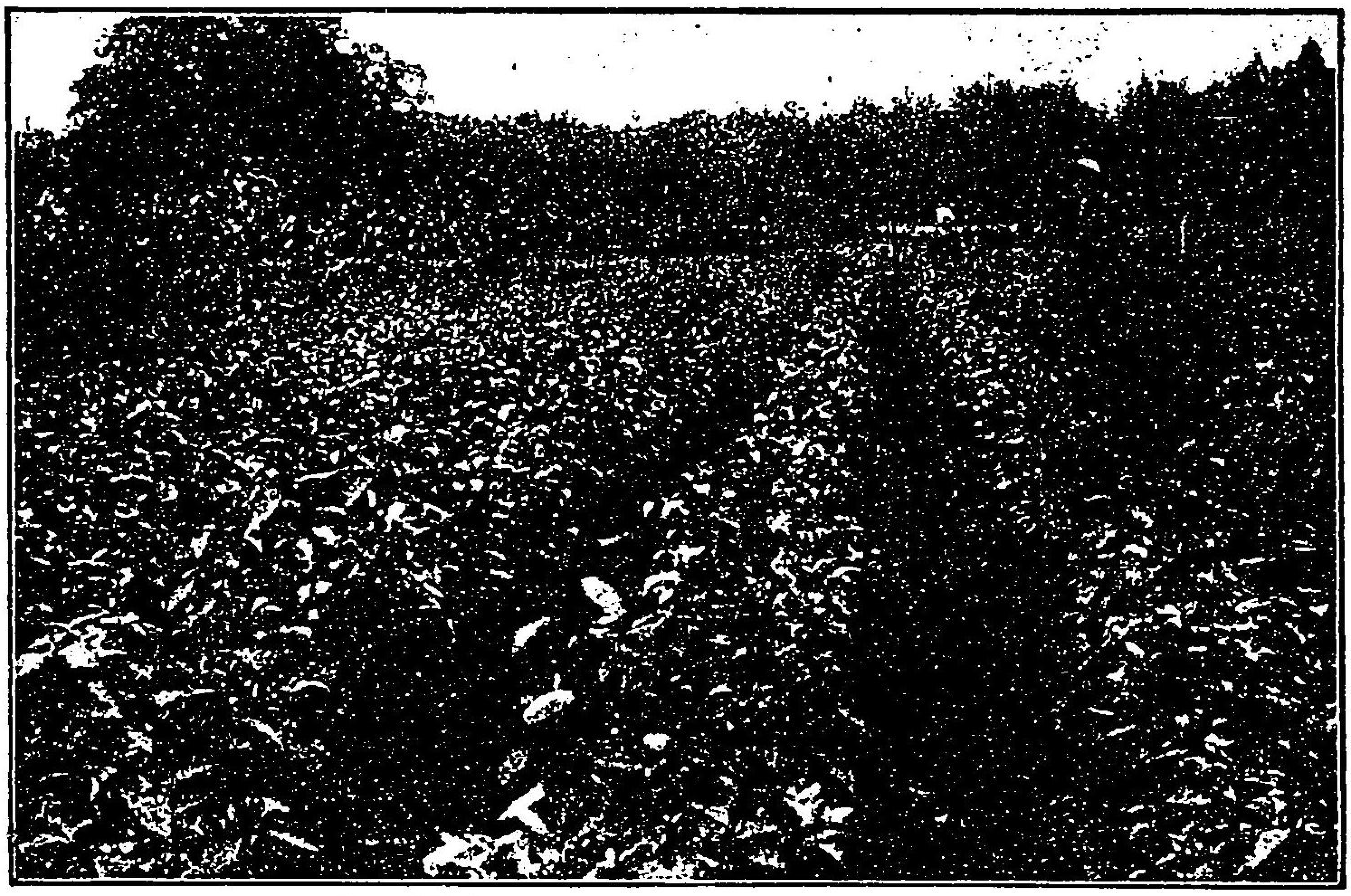
【霧島岑神社】 小林村細野にあり、瓊々杵尊、木花開耶姫命、彦火々出見命、豐玉姫命、鸕鷀草葺不合尊、玉依姫命を祭る、續日本紀に仁明天皇承和四年八月、日向國諸縣郡霧島岑神預官社とあるもの是なり、鳥羽天皇の天永三年二月山上大に炎上し又六條天皇の仁安二年噴火の爲社殿燒失し、後又四條天皇の文暦元年十二月噴火の爲め社殿燒失し享保の末新宮造營し、明治六年小林鄕に社夷守神社を合祀し、更に霧島岑神社を夷守神社の跡に遷しぬ。

【狭野神社】 は小林村に隣接せる高原村蒲牟田にあり神武天皇御降誕の靈地なり、祭神は神武天皇、正妃吾平津姫媛命、天津彦火瓊々杵尊、木花開耶姫命、彦火々出見命、豐玉姫命、鸕鷀草葺不合尊、玉依姫命を配祀す、社傳によれば人皇五代孝昭天皇の御宇、社殿を造營し延喜五年別に一社を建て、瓊々杵尊以下五柱の神を祭り敏達天皇の御宇霧島山と勅號ありしといふ、延暦七年霧島山大に噴火し、社殿炎上せしが中にも文暦元年十二月噴火飛來し、社殿堂宇燒失す、依て東霧島に遷し天文十二年、高原鄕麓村に假に社殿を建て、

新たに改築せる小林警察署

遷座す、慶長十五年再び狹野の舊地に遷座す、寛永十四年二月野火の爲に社殿燒失し、所藏の古文書舊記什物等都て灰燼に屬せり、享保元年九月赤噴火の爲社殿炎上せしを以て、御神体を小林村細野に遷せしが同六年に還幸あり、明治三十二年に至り宮崎宮獨本社の故趾等を目的とし神武天皇御降誕大祭會起りたるを以て其會に請ひ、舊宮崎宮神殿拜殿を此に移し、神苑と倶に修理を加へ尙社務所を新築し同四十年五月三十一日遷宮式を擧ぐ、社前蓊鬱たる數百株の老杉は慶長年間朝鮮征伐の時藩主島津義弘、勝利祈誓の爲藩士新納武藏守をして栽植せしものなりと云ふ、其成育甚だ良好にして本末大差なく甲乙大小なく丈長雲を凌ぐの觀ありて狹野の杉とて世に名高きも惜むらくば明治四十四年九月の暴風雨に際し老杉奇木九十八本の多きは風害に倒れ大に其偉觀を失せり。

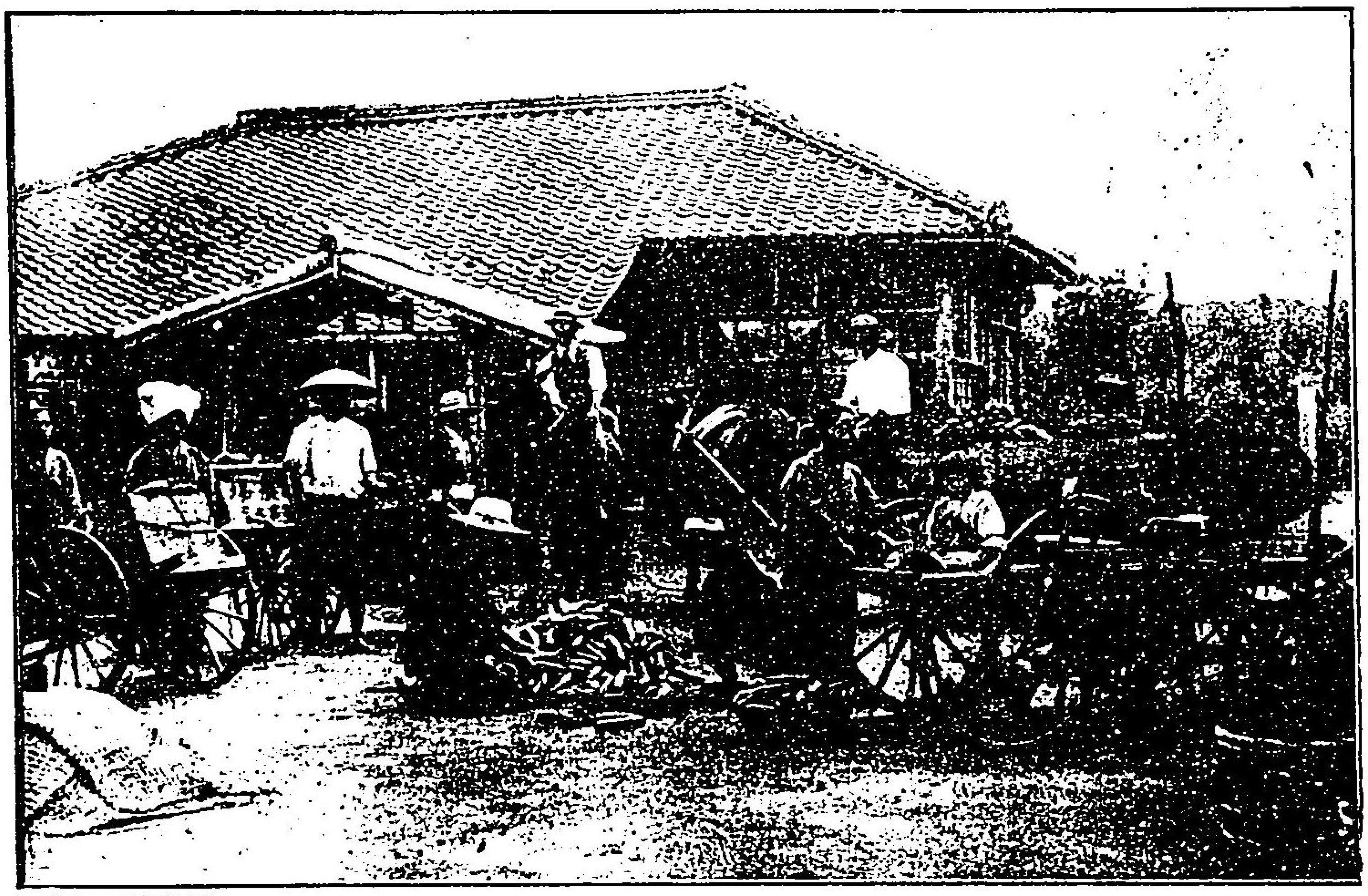
【白鳥神社及溫泉】 小林村に北隣せる飯野村に霧島山脈と蜒絡せる白鳥嶽あり彼の白鳥神社は此嶽の北腹にあり、縣社にして日本武尊を祭る、島津義弘崇敬の社なりきと云ふ同所に白鳥溫泉あり金創及疝瘡に宜し、浴場二ヶ所此頃旅館等新築改築等ありて春秋浴客頗る多し。



西諸縣郡小林村宮之原農園(其一)馬鈴薯栽培の景

西諸縣郡小林村宮之原農園(其二)馬鈴薯圃

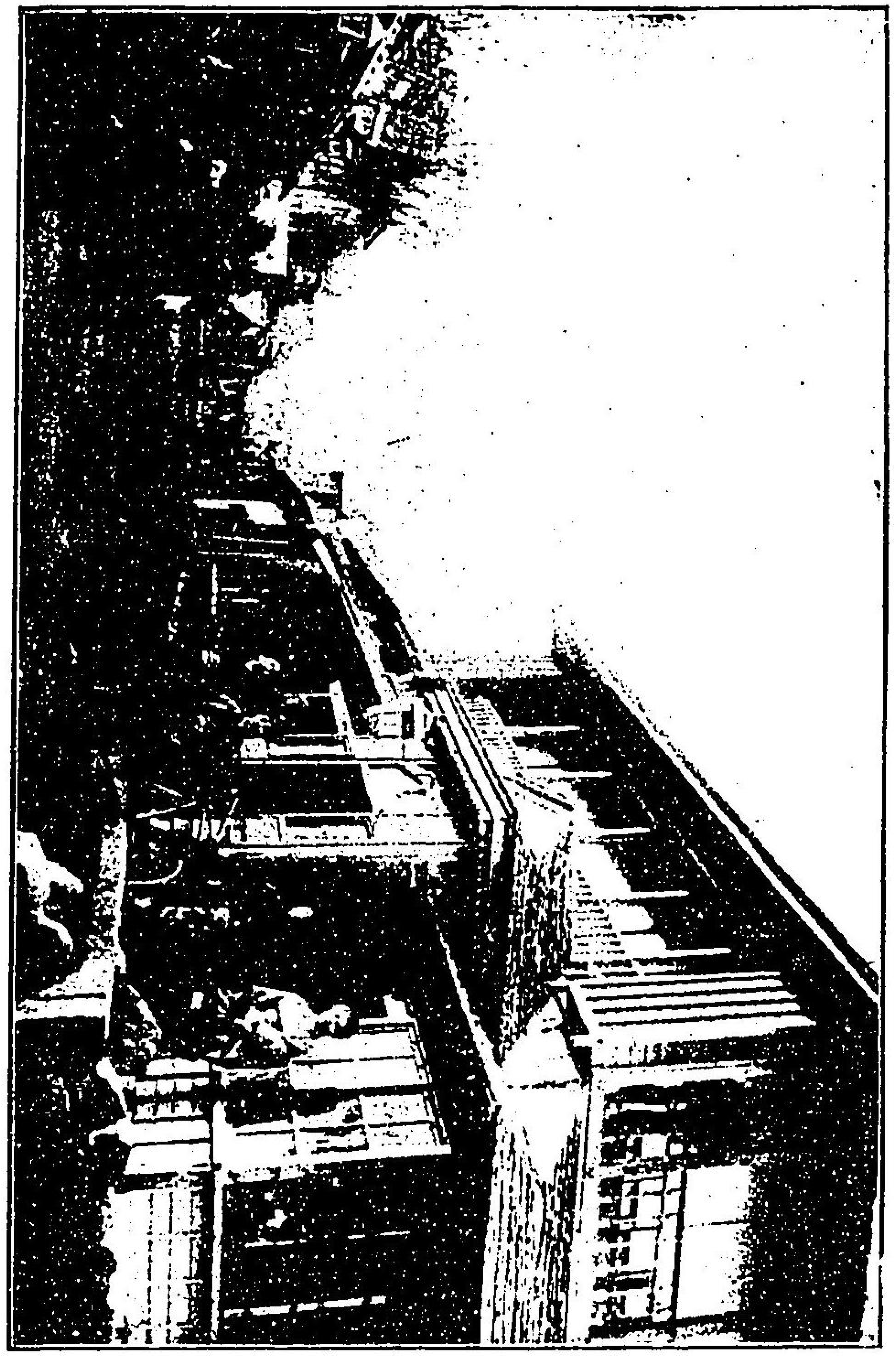
西諸縣郡小林村宮之原農園（其三）梨果圃中に胡瓜栽培の景



西諸縣郡小林村宮之原農園（其四）胡瓜運搬の景

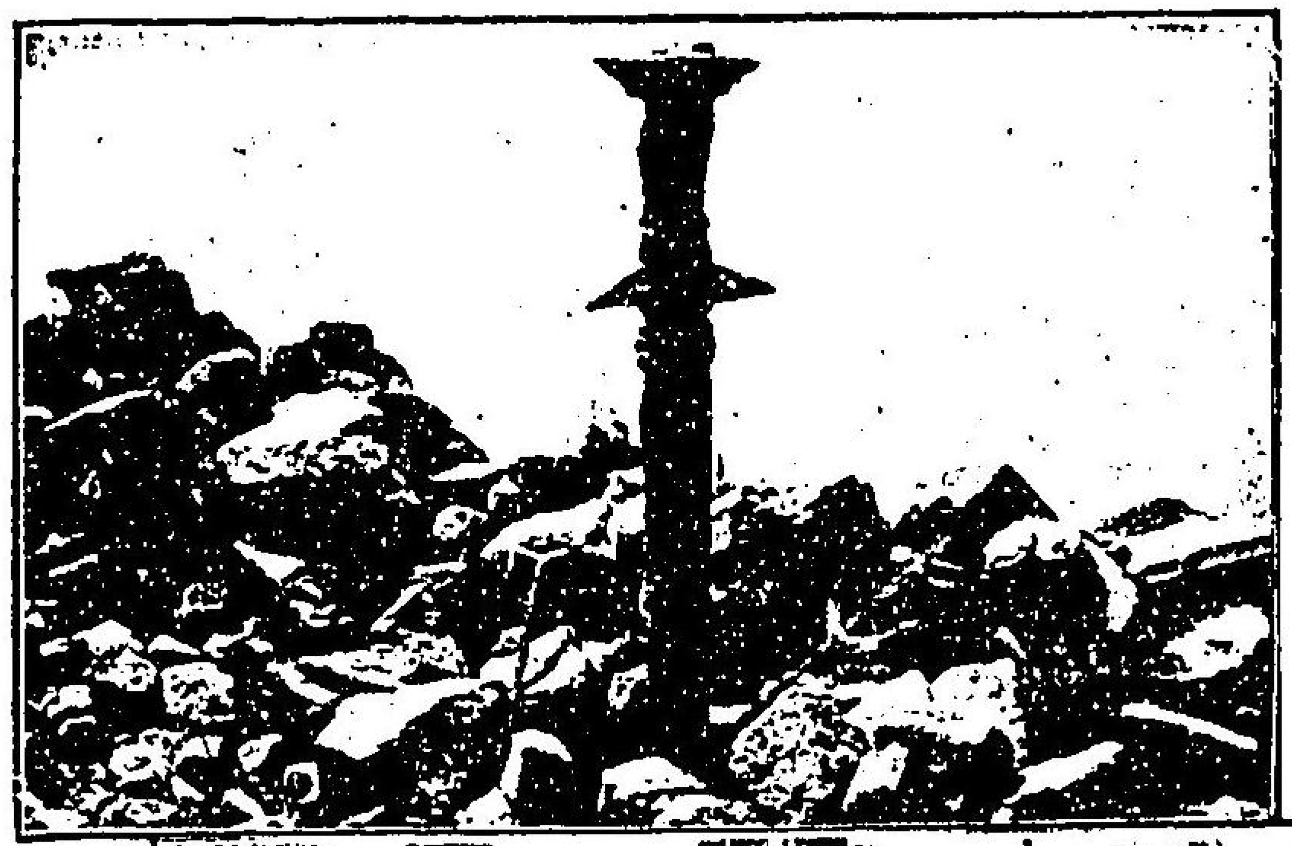
西諸縣郡小林村宮之原農園(其五)梨果園及び梨苗圃

西諸縣郡小林村宮の原農園(其六)果樹園



松屋旅館

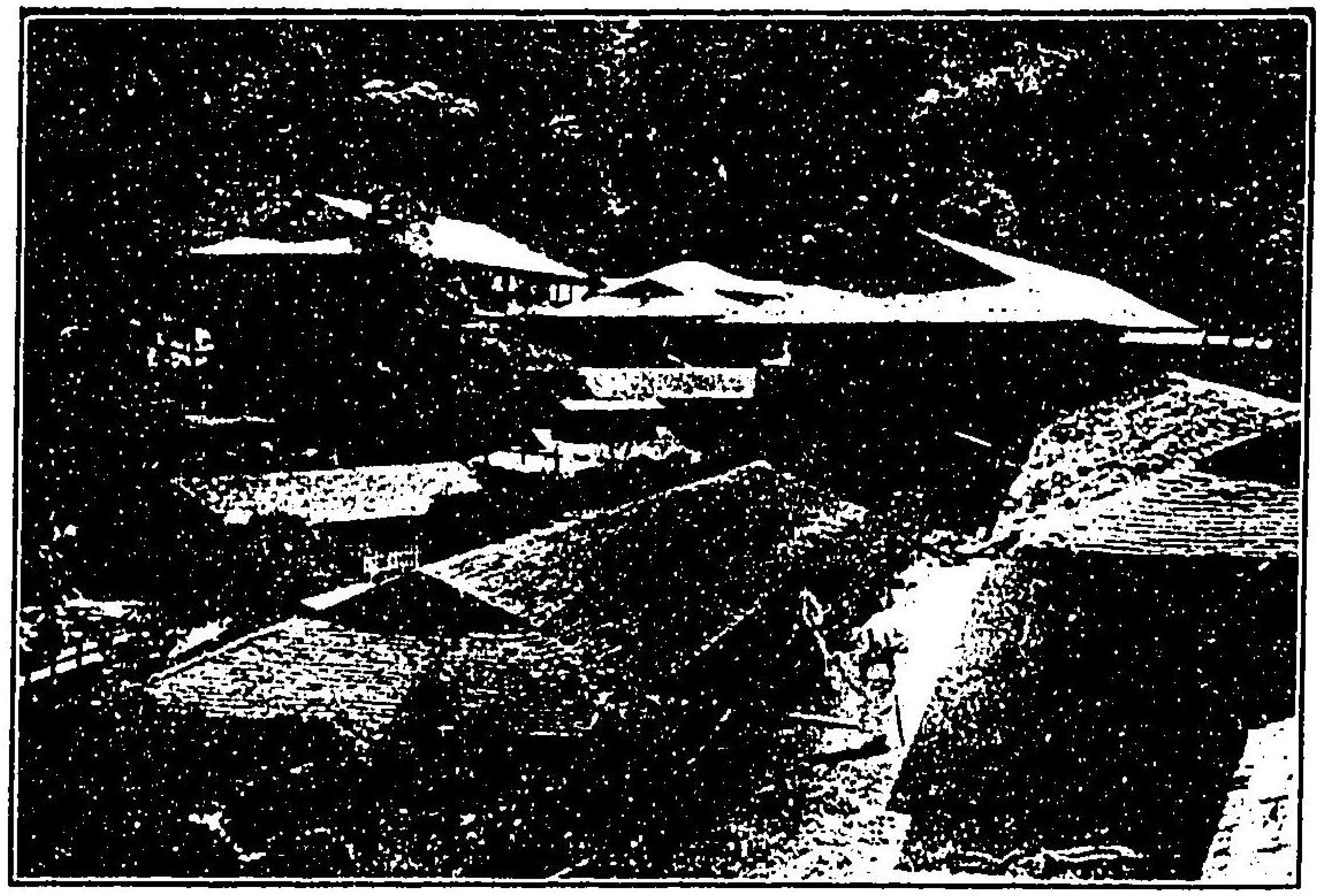
小林村五日町



天の逆鉾

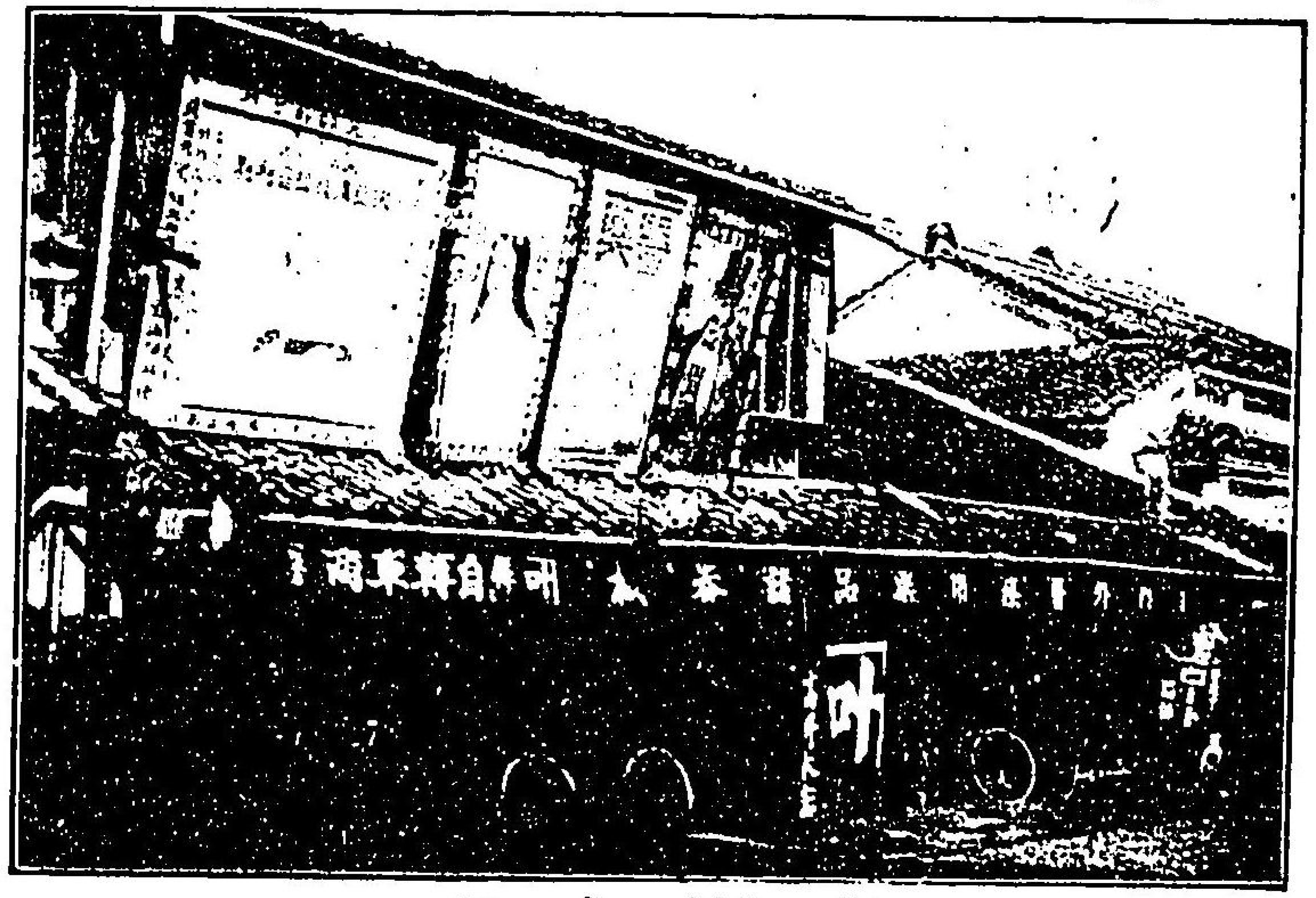
霧島宮

霧島山大噴火



霧島明礬湯　高千穂旅館の景

内外醫療用藥品商並ニ英米各國自轉車商



都城町　高野本店　電話一五一番

霧島記

霧島の靈嶽は日隅薩の三州に跨り、都城の西北に巍然として屹立し、雲表に高く聳へて、火煙常に絶えず、今其由來を探尋するに、混沌たる太古に於て、此峯に皇孫瓊々杵尊天降り座しゝとき、霧深く覆ひて四方暗憺として辨せざりしに、此地の國津神の敎によりて、此處にありし田に登りたる稻千穗を拔きて、蒔き散らし賜ひしかば、霧晴れたりき之より霧島嶽を一名高千穗と唱ふるに至れり、其稻千穗の登りし田は今尙は東襲山村字田口にあり後世神社を建てゝ稻葉神社と稱し奉れり故に此の畏き神業によりて、今も此山に登るものは稻穗を散らして其霧を拂ふとぞ。

霧島嶽と稱する名の下に、東西二つの巉峯あり、古來より之を二上と呼ぶ、一つは東嶽即ち高千穗峯、一つは西嶽即ち韓國嶽之れなり、而して此霧峯はかけまくも鳴呼に畏き　神祖天照皇大神が高御產靈二神の最も奇しく尊き神敎にて大神勅を以て　天津璽即ち三種の神器を天孫瓊々杵尊に授け給ひ、依りて天孫天の岩座を離れ（高天原の皇位）天の浮橋に立ち、天の八重雲を稜威の道別に千分きて此峯に天降り座して、我皇統を始めて開闢せられし神祖の天降り皇祖の御誕生したまへる一大靈跡なるなり、霧島と云ふは當時朝霧夕霧の薰滿國に

して其浮渚と古史にあるは即ち天の八重雲深く霧晦かりし處なれば霧島とは名付けたるなり。

斯くの如き靈地なれば往古は更に今に至る迄、神氣威靈の在りて奇瑞最も多し、此山の週回二十里餘高さ六千尺山腹常に雲を帶ばざるなし、絶頂は稍〻平にして壇の如し、彼の有名なる天の逆鉾は此の高千穗峯の絶頂に建在し古色澱蒼にして自ら千古の遺物たるを偲ばしむ噴火口は此峯の南中腹に位し周圍殆んど一里と稱す内部は溶岩沸騰して轟々と鳴り響き煙は絶えず濛瞑として天を蔽ふ而して此絶頂に於て四望すれば日薩隅肥の山川は蒼々として眼下に收むるを得、東西南は海洋渺々として天を摩し、種子ヶ島屋久島を初めとし、薩南の諸島處々に散點せり、西北の間遠く肥筑豐の諸峯微茫として思を馳せ目を樂ましむるの勝境は實に比類なき壯觀なり、山中氣候總じて世に異り毎年秋の比より初夏に至りて南嶺に雪消へず、九夏三伏の時と雖も山中猶は綿衣を纒ふて苦熱を知らず、又此深山中には時々自然生の稻の穗を見ることあり是れ神代より名にし負ふ千穗の奇瑞の千秋五百長秋に神の御恩德の蒼生を惠み賜ふなりと、農民の目前に示現することもありと。

霧島神宮

本宮は祭神　天邇岐志國邇岐志天津日高日子番能邇々藝命相殿

木花開耶姫命、彦火々出見命、豐玉姫命、鸕鷀草葺不合命、玉依姫命、神日本磐余比古命の九柱を祭る、攝社に野上神社、長尾神社、霧島峯神社、霧島東神社、末社に、奥宮、天子神社、若宮神社、松瀬神社、飫富神社、七社神社、市岐神社、竪神々社、鎭守神社、稅所神社、門守神社あり。

當宮は官幣大社にして鎭座地は高千穗峯の中、絶頂より約三里西に下る鹿兒島縣姶良郡東襲山村大字田口にあり。

本宮建築年度は上古に渡れる事は詳かならざるも欽明天皇の御代、慶胤と云ひし人造營に從事して竣功ありしを其後山嶺噴火の延燒に罹り爾來村上天皇御代天暦年中再建せられ當時の神殿は字瀨戶尾と云ふ所なりしよし、其後文暦元年甲午十二月二十八日山頂噴火熾んなりし時宮宇及び神代の靈寶傳記宣命等盡く燒燼し漸く神輿を供奉して字待世に至り此所に假鎭座爲し奉れり爾後二百五十年を經て、寛永二年總て炎上す後十年を經て、正德五年五月再び造營成る其後百六十六年を經て明治十三年十月に至り修繕を加へられ今日に至れり。

【霧島の七奇】（と云ふあり）●風穴●龜石、之れは共に舊燈道の左右にあり昔より靈跡なり

●御手洗川　之れは燈道の下の山蔭より湧出する清水にして中に氷神を祭れる小祠あり此

水毎年舊三月末四月初の頃より湧き出し舊十一月末十二月初頃に至りて涸る古より參詣人此處にて手を洗へば頓に六根の塵を除くと云ふ故に昔時は竹筒に入れて唯一の土産とせしとぞ然るを何時の頃よりか此の靈泉を以つて麥の粉砂糖に代へて今の霧島粉砂糖と云ふはこれなり、又此靈泉の多少によりて、往古より其年の豐凶作を占ふと云へり。●兩度川は霧島神宮の西の谷間より流れ出づるものにて出初は舊四月上旬頃俄然湧出して舊八九月頃一滴もなく又日數を經て大に汎濫し舊八九月に至りて又涸れ毎年雨時にかゝはらず其時節に至れば即ち出づる事又涸るゝ事違ふことなし。●仙瀧　霧島神宮の西にあり。●文字石　同じく神宮の西にあり。●花立石　神宮の北方嶽道にあり高さ二尺五六寸位なり。

【霧島諸温泉】　霧島には種々の温泉あり、其内最もよく世に知られたるものを明礬湯、硫黃湯、榮之湯、新湯なりとす、何れも相當の設備ありて四時の浴客絶ゆる事なし、道は霧島神宮よりするものと始良郡牧園村よりするものとの二あり、何れも未だ車輛通ずるなく、僅に籠、馬背等を借るの便あるのみなれば、多くは輕裝して徒歩するを例とす、而して霧島神宮より明礬温泉までは凡二里半にして他も概ね此附近に點在せり、即ち硫黃湯（硫黃谷温泉）は明礬湯より二町餘の下方にあり、榮之湯（榮之湯泉）は夫より八町許西方にして中に山を隔て、新湯（高千穗温泉）は明礬湯より東北山を越えて半里餘、湯野湯（湯野温泉）は此處

を距る東南約一里、悉く獨立の經營にして旅館の附設あり、又日用の諸品は絶えず始良郡牧園地方より輸入し來りて浴客は湯治中不自由を感ずる等の事なく殊に猛夏の候と雖も肌なほ寒さを覺ゆる緑陰の幽境に僻在したれば、避暑の地としては最も好適のところなり、而して明礬温泉には鉄泉、鹽泉、硫黃泉、明礬泉、硫黃谷温泉には鹽泉、硫黃泉あり其他は悉く硫黃泉のみなるが何れも諸種の病に効顯多し。

（附説）近く鹿兒縣に於ては始良郡牧園より硫黃谷温泉に到る道路を開鑿すべき計畫あり因つて當都城町高野友吉氏（明礬温泉持主）は更に仝所より明礬温泉に達する道を開き、猶高等馬車を構へて浴客の往來に便すべしといふ。

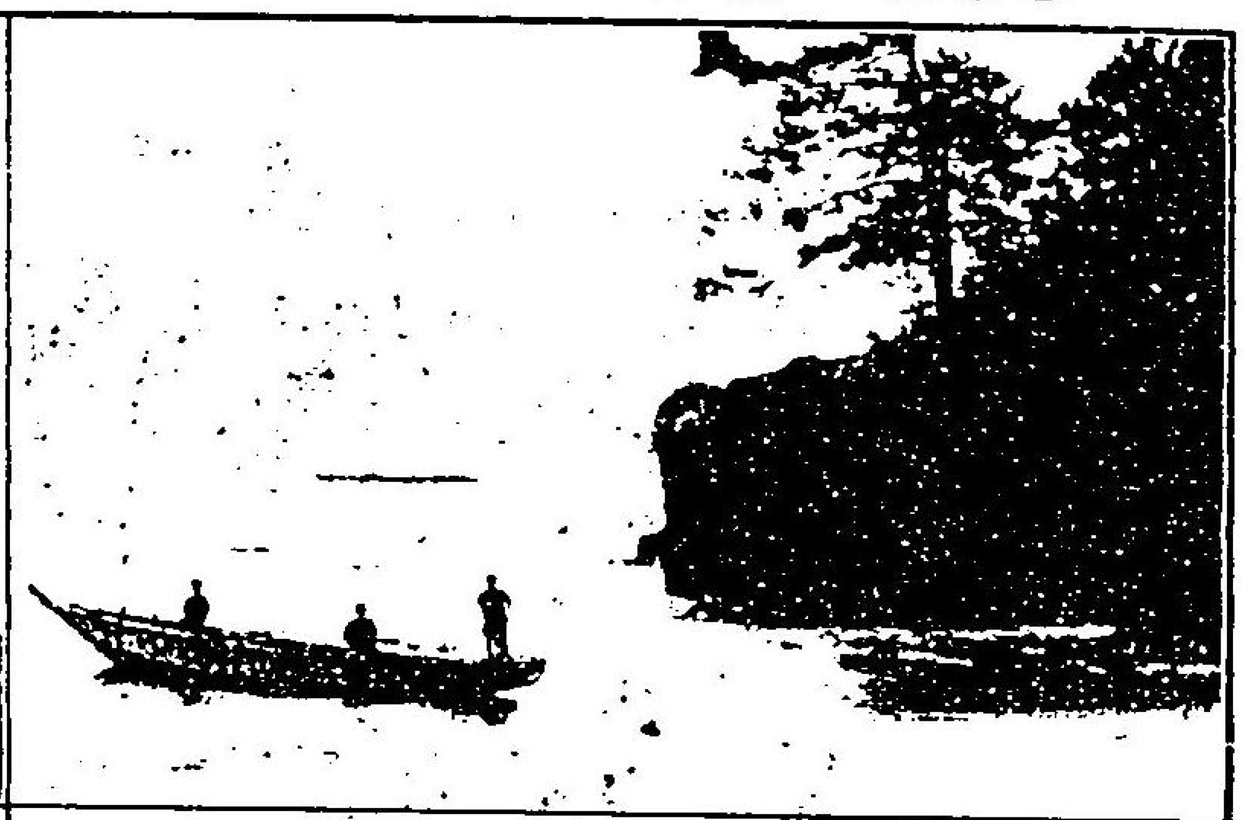
志布志上町通の景

志布志有明湾の一部(東)

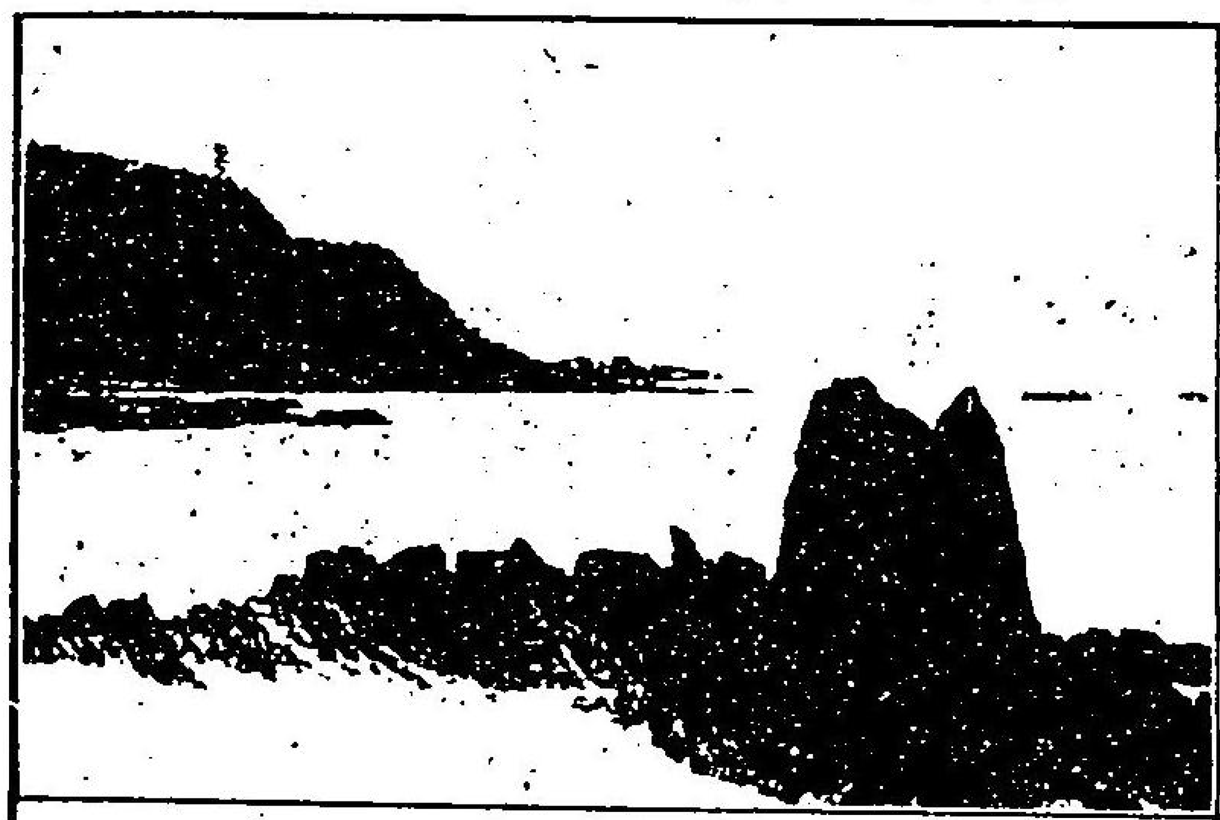
鹿兒島縣立志布志中學校（其一）

鹿兒島縣立志布志中學校（其二）

志布志　夏井の磯火

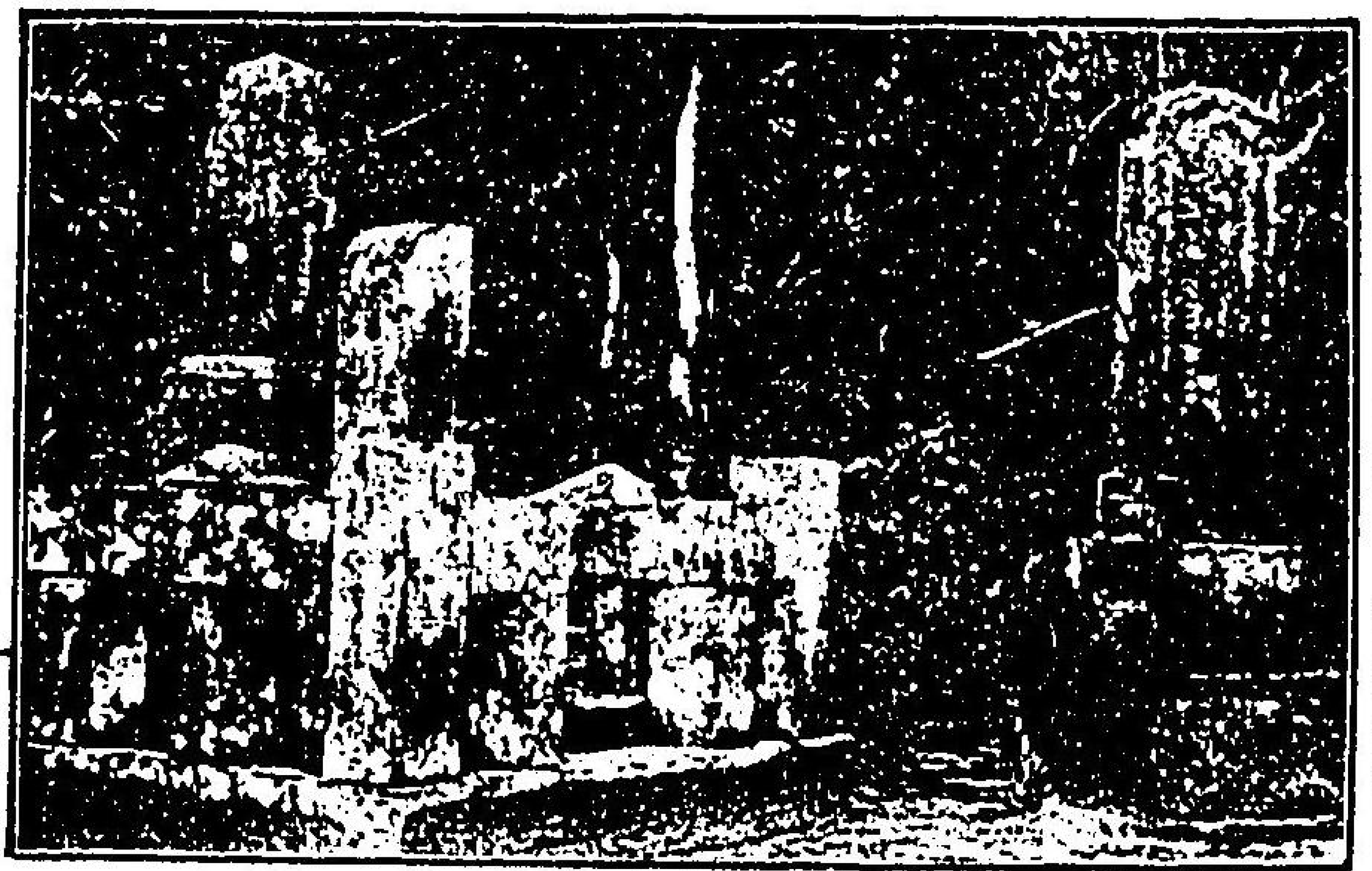


志布志　夏井の飛島



夏井辨天島

志布志　觀音崎より平瀬を望む



志布志　松尾の城趾及柏州の墓

志布志　島津氏久公の墓

志布志　龍興山大慈寺

志布志記

【概説】 志布志町は鹿兒島縣大隅國囎唹郡の南端にあり、背に靈峯霧島の餘脈を負ひ、前に有明灣の蒼波を望み、東西二里、南北五里に亘り、人口一萬四千を有する一小都市なり、從來住民の多くは、半農半漁の生計を營みしと雖、三十七八年戰役前後より、商工業頓みに殷盛を極め、近時全く市の面目を一新するに至れり。

【沿革】 志布志地方は其昔（そのかみ）、諸縣郡救仁院高濱の庄と稱せしが、人皇三十九代天智帝の御后玉依姫、筑紫の端て、頴娃の郡に歸らせ給ひしを、天皇殊の外慕はせ給ひ、忍びて筑紫の行幸の途次、此地に御船着あり、一先づ山假屋に皇居を建させ給ひ、爰に暫く栖せ給ひけるが、在住の士民（志布志屋舗）の妻女、僅の御志にとて、布の御手拭を獻じ奉りしに、此妻女の召仕下婢、又た其主女の優しき心にも慣ひてにや、布の手拭を調て御志にとて獻上なしける、然るに天皇叡感斜ならず、主女の布の手拭を志に奉りしに、其下婢の同じき志とて御手拭を獻ずるは、上下より布を志す、誠に是は上下の志布志なりとぞ綸旨ありければ、皇居の附近をば志布志屋敷とは名付け、これより何時か此高濱の郷中都て（すべて）を、志布志とは呼ぶに至りしと傳稱す。

後ち島津家六代の太守氏久畠山を滅ぼし、此地に在城し、其後一度新納家一所の地となりて、新納四郎忠茂迄凡九代居城せしも、天文七年島津忠朝外二將の爲めに攻圍せられ、忠茂終に佐土原に走るに及び、世々島津家の所領となれり。

爾來幾百年を閲すと雖、土地僻遠にして通路險惡、僅かに海路運輸の便ありしのみなれば、文化遲々として洽からず、漸く津浦の一漁村に過ぎざりしが、晩近各驛への道路開鑿さるるに從ひ、恐るべき長足の大發展をなし、加之有明灣の軍港に擬せらるゝや、著しく地方住民の向上心を促進し、敎育、宗敎を初め行政經濟等の各種機關殆ど完璧の域に進み、市況日に月に隆昌に趨くの氣運を呈せり。

【各種機關】　今ま志布志町に於ける各種機關の、重なるものを擧れば左の如し。

▲學校　志布志中學校外小學校八校、南陽學舍

▲研究會　學校研究會、町村事務研究會

▲青年會　志布志村青年會、全部會七ヶ所

▲醫師會　志布志村醫師會

▲衞生組合　志布志衞生組合、外六ヶ所

▲信用組合　志布志、夏井、柵ヶ下各信用組合

▲漁業組合　志布志漁業組合

▲納税組合　四十七ヶ所

▲養豚組合　一ヶ所

【氣候及人情風俗】　土地九州の東南に偏在し、殊に暖潮日向洋を流れつゝあれば、四季の氣候溫暖にして甚だしき變化を見ず、地味肥沃にして能く耕作に適せり、人情及風俗に至つては、地理的並に歷史的關係の上より、著しく朴直粗野にして、多少鄙びやかなるを免れずと雖、亦頗る義理に厚く、人情微かにして律義一遍他を顧みざるの風あり。

【名勝古跡】　由來志布志地方は山水明媚の勝地に富み、又た古趾城跡の尋ぬべきもの多く四時文人墨客の探賞するもの曳も切れざる程なるが、殊に以下錄するものは、愷に志布志地方の誇りとなすに足るを信ずるものなり。

▲山口神社　安樂村に鎭座、地頭仮屋を距る申酉方廿八町餘、祭神大座（天智天皇 侯姫 玉依姫 大友親王 持統天皇 乙姫）山口六社大明神と號し、志布志の總鎭守となす、鐘樓に古鐘を掛け其銘にいふ。

讃岐國。石志尾八幡宮寃鐘。金輪聖王天地久雨庄豐示事民。安社家繁昌與佛事結緣上下願圓滿

文久己巳十一月日大工丹治是助亮秀坊

▲若宮神社　志布志村にあり（志布志村を里俗に帖村といふ）地頭仮屋の卯辰方二町餘、祭神一座（持統天皇）山口大明神春秋の祭、市渡りとて神輿を此社に行幸して祭祀あり。

▲秘山密教院寶滿寺　志布志村にあり、地頭仮屋を距る卯方三町餘、鎌倉極樂寺信山上人の開山にかゝり、本尊如意輪觀音を安置す、又た本堂の左に鶴ヶ岡八幡宮の祠堂ありて鎮守となす、當寺什寶に舍利塔あり、曆應三年足利左兵衛督源直義一國一粒奉納の舍利なりと傳ふ、山内に運慶墓あり、運慶は佛師定朝六代の孫、建久八年東大馬脇侍を作り、世に名高き人なり、寺説に寶滿寺の本尊下向に際し、側を離れずとて當寺に下り、此所に死したるより廟所あるなりといへども、眞僞甚だ疑はし。

▲中の宮神社　安樂村に鎮座、地頭仮屋より申方一里七町餘、祭神一座（玉依姫）慶長十二年丁未十二月寶殿造立の棟札を納む。

▲新豐山永泰寺　志布志村にあり、地頭仮屋を距ること己午方約五丁、福昌寺十八世代賢守仲和尚の開山にかゝり、本尊釋迦如來を安置す、天正七年己卯三月建立にして、邦君大中公の位牌を安置す。

▲蜜嚴山丈陸寺大性院　志布志村にあり、地頭仮屋より寅卯方七町餘、艮範法師の開山にかゝり、本尊阿彌陀如來を安置す、又た寺内に天滿宮を安ず、天文三年甲午八月新納近江守忠勝の建立せるものなりと。

▲山仮屋　志布志村にあり、地頭仮屋の丑寅方凡そ八町餘、大性院境内の山中にして、五反歩許りの平地なり、三十九代天智帝后大宮姫のあとを慕ひ給ひ潜（ひそか）に此地に在り、仮に宮居を營み給ひ、暫らく皇居ありし所と傳稱す。

▲志布志屋鋪　志布志村にあり、山仮屋の下なり、天智帝山仮屋に潜居し給ひし時、此屋鋪の士民の妻女布を天皇に献上なせるは、沿革の章に記述せしが如し、去ればにや今尙は、此辺り田畠の字志布志屋鋪の名のこれり、衆妙集に

霜月二十八日日向國志布志といふ所近きわたりにて

冬枯れに柿の殘りけるを見て

法印玄旨

冬枯れに殘れる柿をかきとりて

猶志布志とやかふりくふらむ

▲福壽山無量院海德寺　志布志村にあり、地頭仮屋を距ること申酉方凡そ七町二十間、施行七世陀阿上人の開山にかゝり、本尊阿彌陀如來を安置す、曆應元年戊寅の歳（とし）陀阿上人巡行の時建立せりと傳ふ。

▲有明の浦　志布志村の海濱を云ふ、地頭仮屋の午方八町、東に土肥の岬を望み、南に

火崎の鼻突出し、西は大隅國高隈嶽を一眸の中に收め、前に枇榔、權現の二島横はり、山紫水明、風光景勝の美、いと云はむ方なし、安永三年の彌生中、遊行五十三世尊如上人此地に巡行して。

たぐひなや春も名殘の月のかげ
浪しろ妙の有明の浦

▲權現島　有明浦の前にあり、林岳高くして能く此浦の波濤を除く、波の上權現を安置す、寶滿寺の格護なり。

▲松尾の城跡　志布志村にあり、地頭假屋の酉方二町餘、楡井遠江守頼仲居住す、後ち畠山治部大輔直顯頼仲を滅して自ら居城となす、直顯落去の後ち新納近江守時久の居城となりしも、時久の子孫忠茂に至り、天文八年七月沒落し、島津忠朝の領地となる、松尾城の東に內城あり、邦君齡岳公應安年中、大峪良內城を去て爰に移り、恕應公にいたりて居城せしと云ふ。

▲腰掛石　麓の馬塲の垜の中に埋り、長さ一丈餘の石なり、天智帝暫らく腰を掛け玉ふと云ふ、今に山口神社濱殿下りの時、此馬塲にて神輿を止るは其故事を傳ふとなり。

▲龍興山大慈廣慧禪寺　志布志村にあり、地頭假屋を距ること申酉方十一町、玉山和尚

の開山に係り、本尊千手觀音を安置す、曆應三年楡中遠江守頼仲大隅國肝附に建立し、帝釋寺と號す、其後今の地に移し、大慈寺と改む、後ち廣慧の二字を賜り、大慈廣慧禪寺と號す、延文二年二月五日頼仲畠山治部大輔直顯と戰ひ、利を失ひ寶治庵に於て自殺す、竭頌位牌の裏に記す。

大事因緣　五十七年　遊戲自在　釼樹刀山

こしかたも又行末も此年の此月のけふ只今にあり

▲頼仲石塔　寶池庵（今興寺）の寺地にあり、尙は十境八景あり、十境は菌萏峯、枇榔島、夜明庭、雲秀溪、潮音閣、枯莖堂、烹金炉、止々庵、清涼軒及綠池にして、八景は龍山春望、古寺綠陰、野市の炊烟、漁浦の皈舟、橋迂の暮雨、江上の夕陽、東營秋月、西塞夜雨雪なり（後に載す）將軍義詮三州の乱を鎭定せんために、朝山出雲寺守師綱同小次郞重綱上使となりて明德二年下向し、恕翁此寺に於て對顏あり、盛饌を進め、和漢の會を催す、又た文祿五年七月近衛信輔公當寺に足を止む、信輔公阿蘇玄與に發句せよとあり

浪の聲や松に入江の秋の海　　玄與

尙は閏七月五日信輔公志布志を船出しけるを祝し

追風も有明の月の出舟かな　　同

十境八景

菌萏峯　　天德 南源

菌萏峯如菌萏開　亭々玉立脫風胎　昔年曾入諸禪夢　感得地無半點埃

枇榔島　　仝 人

枇榔島湧寺南隈　常有仙翁採藥來　何處鳴榔明月夜　漁人得意弄朝回

夜明庭　　弘福 鉄牛

十里汀沙皚布霜　星河臨映散晴光　幾回誤認門前曉　夜半鐘聲出上方

雲秀溪　　仝 人

秀麗淸溪疋練分　廣長舌拂好音聞　紳龍錦鯉爲宮殿　曉夕飛騰有彩雲

潮音閣　　仝 人

閣涌碧空客法界　不須彈指引追尋　雪濤影裡宛然坐　滿身潮音讃梵音

拈華堂　　佛國 高泉

雖建梵堂似鷲山　鋪金抹綠照雲間　金花猶在迦文午　只是無人解破顔

烹金炉　　仝 人

此間原是大炉治　純鉄滑銅那敢當　獨有眞金終不變　愈烹愈煉愈堅剛

止々庵　　南岳 悅山

菴中靜坐豁雙眉　指顧溪山分外奇　止々不須開口說　從來我法妙難思

淸涼軒　　仝 人

茅茨結構倚山岳　蔽日松篁陰氣浮　長夏渾忘三伏暑　晩來爽納一襟秋

綠池　　仝 人

空後鑿成半畝塘　巧心妙手莫能量　一泓烟水鴨頭綠　倒蘸兩輪日月光

龍山之春望　　天德 南源

山頭雲起欲從龍　忽聽雷聲震九重　倒岳傾湫興大用　沛然法降瀉三龔

古寺綠陰　　佛國 高泉

梵王宮殿立何年　煙檜霜杉影接天　經過乾坤如甑日　火雲飛不到庭前

野市炊烟　　弘福 鉄牛

交易向曛人散遲　忽聽玉笛酒樓吹　青煙亂撩四相合　戶々黃粱夢熟時

橋邊暮雨　　南岳 悅山

兩岸橫安龍背潤　人無病涉往來過　陰雲拂地黃昏候　根爾爲霖潤物多

江上夕陽　　仝 人

松門日日立斜暉　債鷗蒲牢吼翠微　風落遠帆望處沒　江空水鳥逐潮飛
東營之秋月　仝人
篷牙堂角露林端　夜靜往來倚曲欄　一片氷輪弁碧漢　射人毛骨亦皆寒
西塞夜雪　仝人
冬深夜氷月凝光　六出紛々下碧荒　若使三軍親此所　猶疑爲主守邊疆

▲御心院　大慈寺の塔頭にて左脇にあり、開山は大慈寺二世剛中和尙にして、本尊釋迦座像を安置す、又た邦君龍岳公及夫人の廟所あり。

▲千年松　大慈寺の南六月坂の松林にあり、昔慈眼公志布志に光條あり、其皈りに際し、此樹下に憩ふ

絶せぬや契りなれたる秋ならん
千年の松のかけに休ふ

時に住僧龍雲これに和して

平原砂麓及層巒　今日送君思萬般
獨立亭々松樹下　高歌一曲和皆難

是よりして千年の松とは呼ぶに至れりと云ふ。

▲御在所嶽　田の浦村にあり、志布志第一の高山にして、地頭仮屋を距ること子方三里餘、天智帝此嶽に登係し給ひ、薩摩國頴娃郡開聞嶽を眺望なし、后のましませし處見ゆれば、宮居をてそ建(たて)めやと詔まいしとなん傳ふ、今に御腰掛石あり、崩御の後和銅二年六月、嶽の絶頂に靈廟を建て山口大明神と號す、又た石の小祠を安置、鎭して天智帝の廟と五字を刻す、尙は二祠あり（一は供奉の人にして一は山神を祭ると云ふ）此所を頴娃平とも云ふ。

▲山宮神社　田の浦村に鎭座、地頭仮屋を距る子方二里餘の所にあり、祭神一座（天智天皇）本社は初め御在所嶽に鎭座ありしを、開聞嶽見へ祟りをなすとて、爰に遷宮せりと云ふ。

▲平瀨　夏井村の海中渚(なぎさ)を距ること三町餘の所にあり、凡そ五六反歩計り平瀨の上に濱ありて、頗る清景の岩あり、海鰕(いせゑび)、石決明(あはび)、螺、ながらめ（鮑の類にして小なるを云ふ）赤貝、海草等殊に多し。

▲船磯　志布志村にあり、往古磯邊にして天智帝下向し給ひ、此所(こゝ)に御船の着きたる所故、船磯とは云ふなりと、今は田地となりて其名のみ殘れり。

▲枇榔島　志布志村の午方海上二里志布志に屬す、島の廻り凡そ一里餘、奇石怪岩縦横に起伏し、竹木又た全島に繁茂し、殊に枇榔樹多く、嶺に枇榔御前の祠あり、祭神一座（乙姫宮）にして、天子遷幸に用ひ給ひし枇榔毛の御車枇榔の葉は、古より此島に産するを献

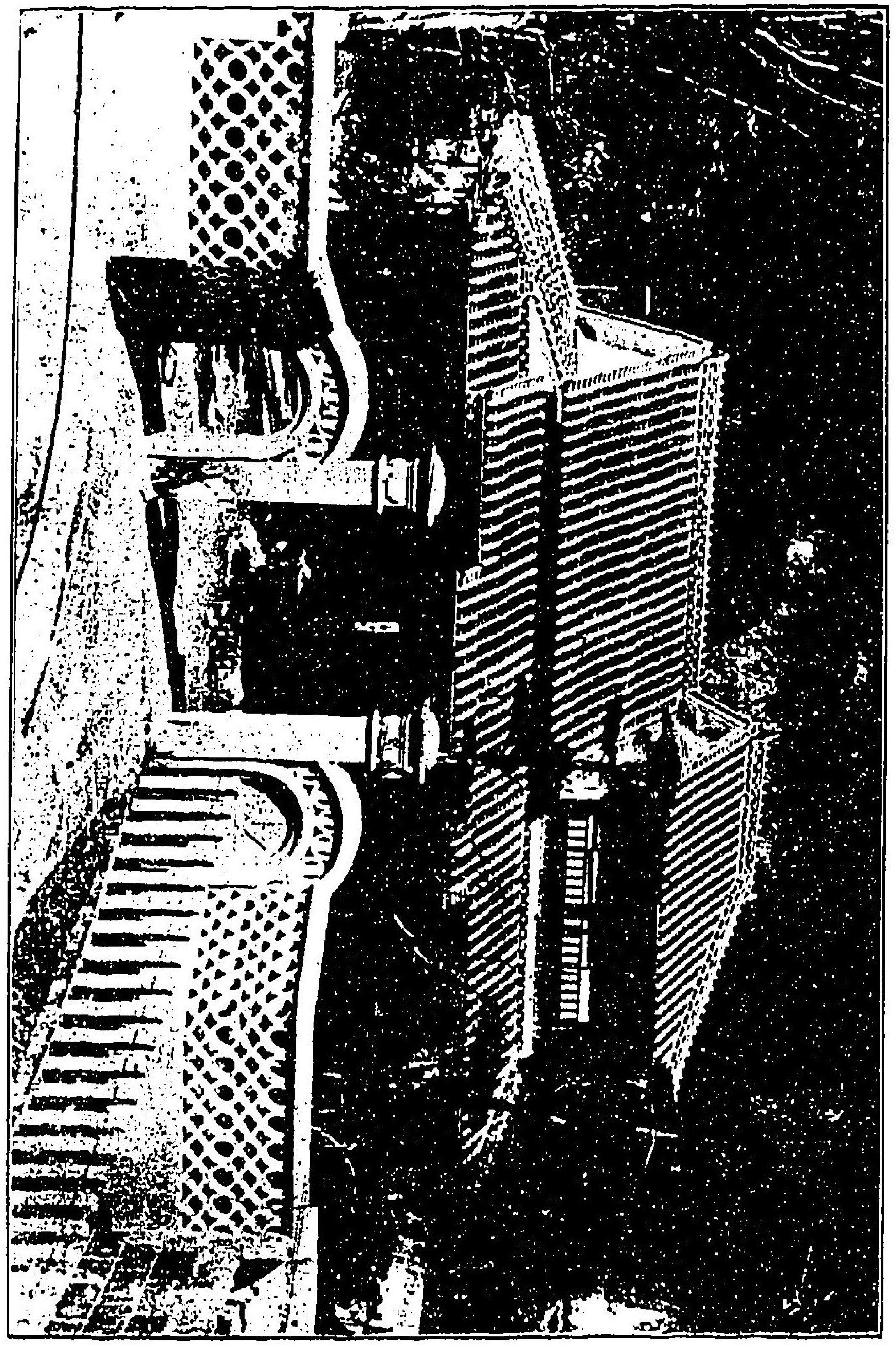
りしと云ふ、寛政二年十二月仙洞御所（百十八代御諱智子　櫻町院第二皇女）遷幸の時も葉百五枚近衛家よりの所望により、京都に贈り禁裏に献納せりと。

▲濱宮神社　安樂村にあり、船磯に鎭座、これ枇榔島枇榔御前の神靈を祟めまつれる所なり、海路たよりあしければとて爰に勸請し、濱宮大明神とは號せりと。

▲一宮神社　安樂村に鎭座、地頭仮屋より申方一里十七町餘、本社は天智帝船磯に着したまふ時、此所に夫婦の老人居住し、一夜の御宿を參らせ、鮑、螺蠑など取りて供御に奉りしと云ふ、今も山口神社にて正月中の午日に、鮑、螺蠑などのつくりものを供するも、此由緣にやあらむ。

▲鎭母神社　安樂村に鎭座、地頭仮屋を距る申酉方一里餘、祭神一座（天智帝一の后倭姫　大友皇子の母さ云ふ）なれども勸請年月詳かならず。

志布志町
兒玉醫院
院主　兒玉元雄

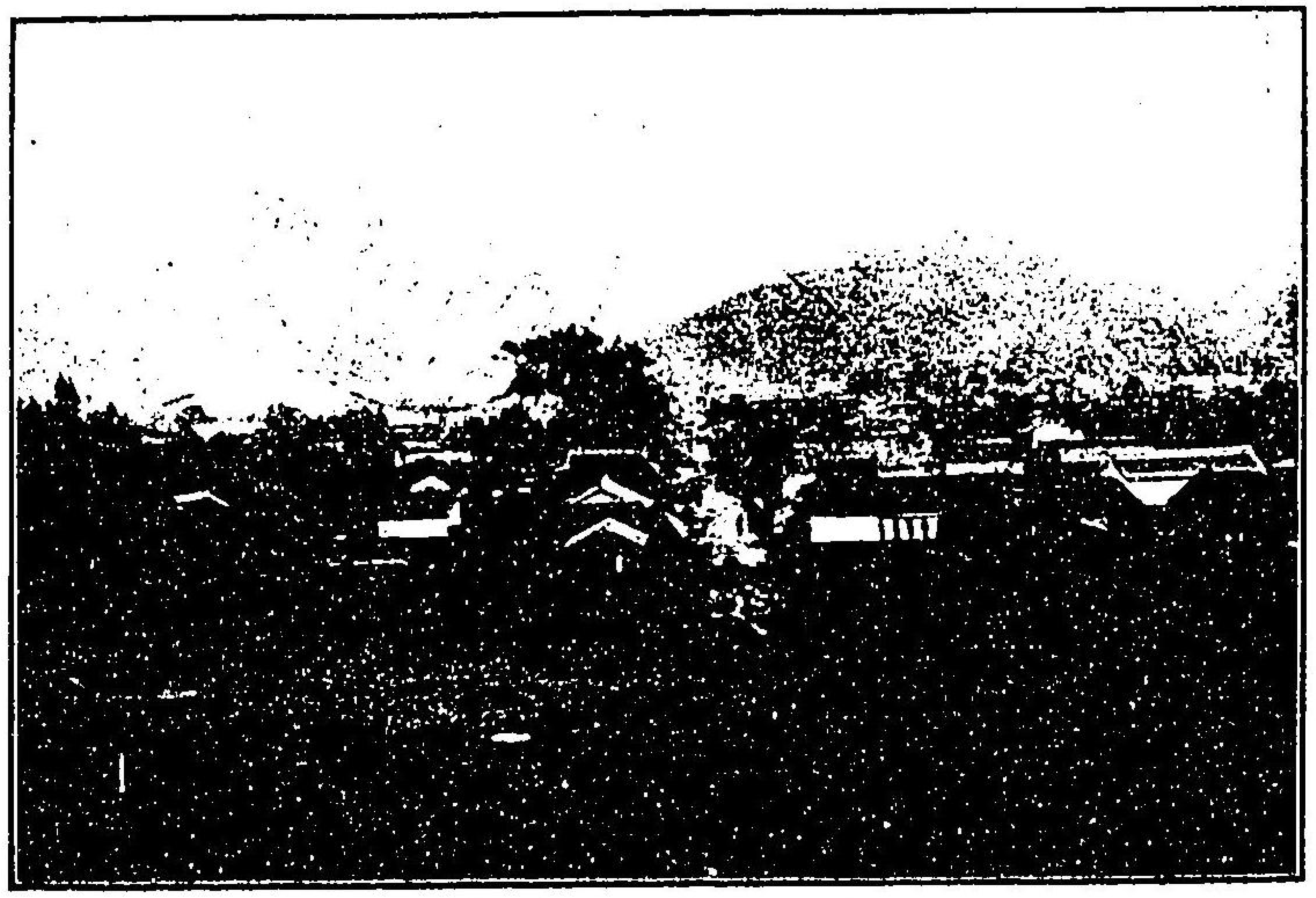


志布志關屋口の別荘

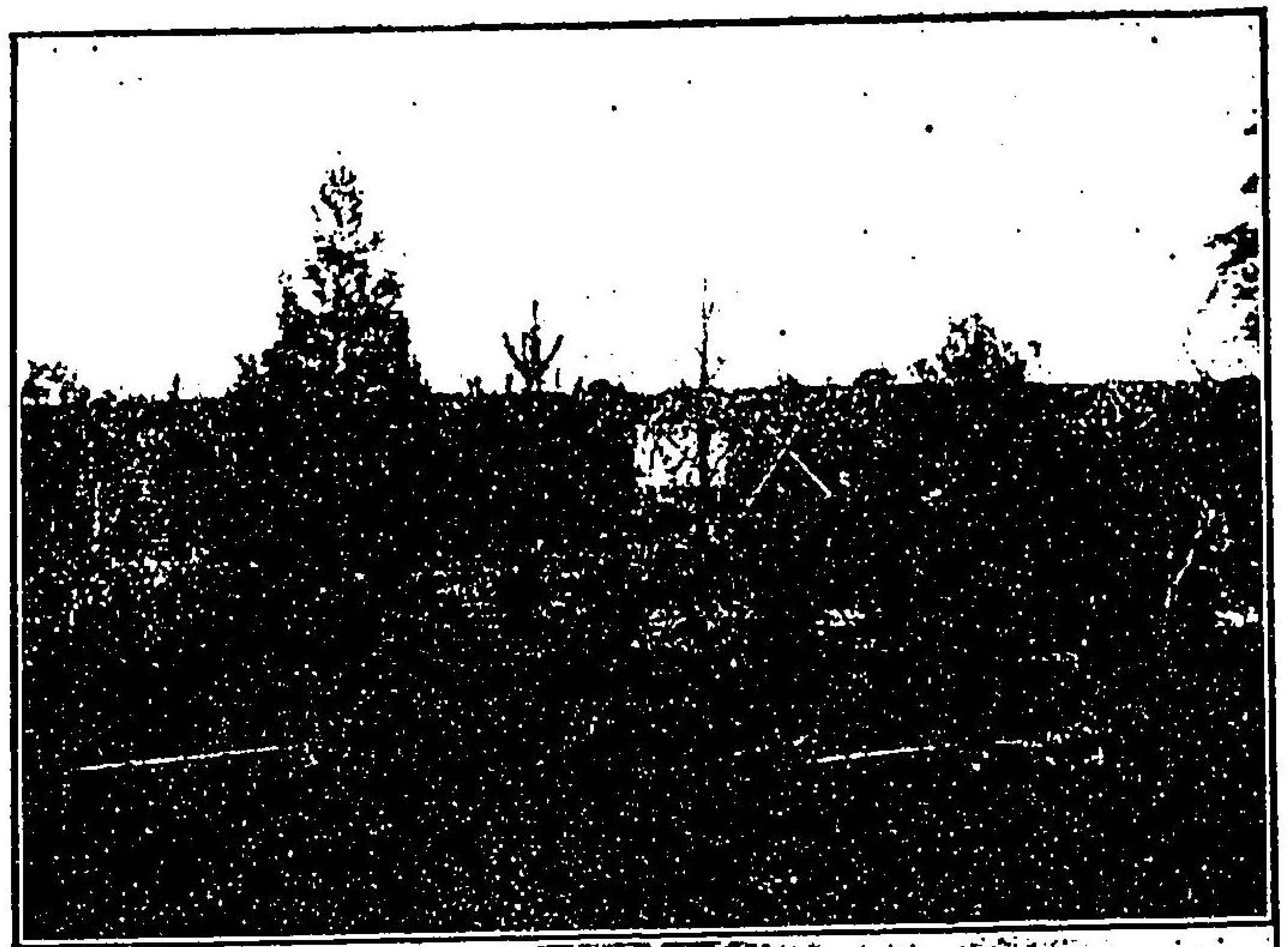
大隅國志布志
飼養種豚
又木愛輔

畜產品評會に於て二等賞を得られたるバークシャー種春雨號

飫肥の舊城址


飫肥町の全景

飫肥招魂社



飫肥 伊東公先祖を祀る五百禩神社

油津港の全景

油津尋常高等小學校

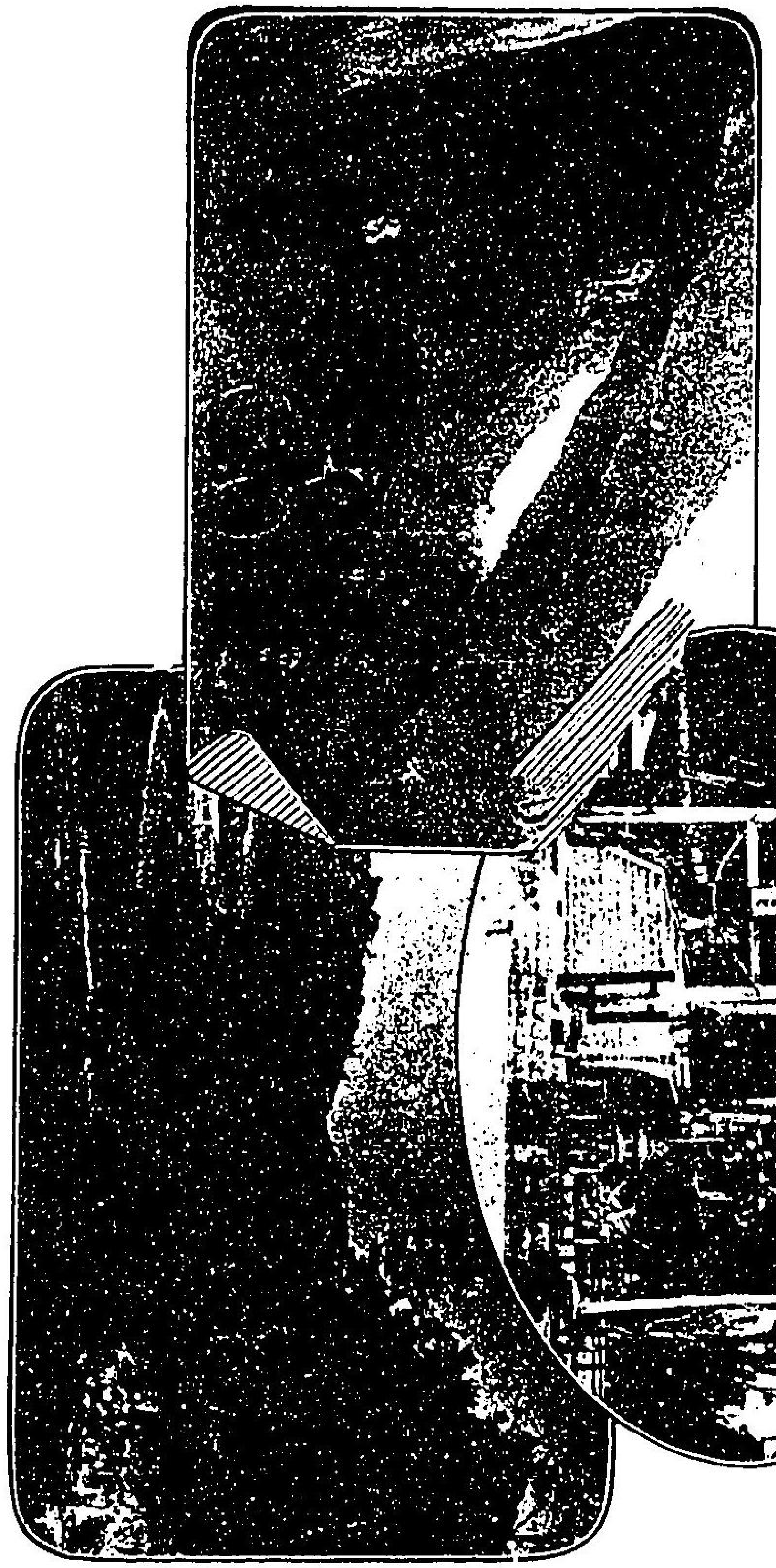
飫肥、油津記

【總說】 飫肥油津は日向國の極南にありて南那珂郡中の樞要地となす、東南は海に臨み北方は連山に接し都城を距る十三里餘飫肥と油津とは約一里を隔てゝ唇齒の關係を有し飫肥が西京たれは油津は大阪にして、油津は縣下の一大要港と稱せられ細島港に次ぐ良港なり、南面して一大灣をなし、大船巨舶を入るゝに足る、灣内東西十町南北十一町餘干潮深四尋餘、滿潮六尋に至る、町の三方は連山を繞らし家屋櫛比商業繁盛の地とす灣を望めば風光明媚遙に大島は灣口に浮ぶが如し、飫肥町は此油津を南に提けて舊伊東氏の藩地五万石の城下郡中の都會人戸千五百を出で市街殷賑富豪大商多し郡役所、警察署、郵便電信局、銀行等多く此地にあり。

經濟の中心は農業にありと雖も商業も亦之に對す近年造林に傾注し縣下斯業の斗たるもの恐らく此地方を排して他に誇るべきものなし、油津の如きは漁業と商業を以て生命となす。

【中尾城址】 は板敷の東隅、中尾の嶺上最高處にあり、高五十餘丈飫肥城を眼下に瞰視するを得る要害の地たり、文明十六年十一月伊東祐國都於郡より出陣して遂に之を攻め落したりといふ、後島津伊東互に飫肥を爭ふ時殊に此地を以て根據となしぬ。

梅ヶ濱の龍穴岩



油津港 吾平津神社

油津港 梅ヶ濱の景

【五百禩神社】 鄕社にして、飫肥舊報恩寺の遺址にあり、社號は伊東祐持始めて日向に下り、治所を都於郡に建てし以來命名せし所にて伊東氏累代の靈を祭り五百三十年を經たり、伊東氏累世の墓所は此裏にあり、日露交戰媾和の大任を帶び我國の光輝を海外に發揚し、勳功世に比類なき侯爵小村壽太郎氏の墳墓も亦此神社の西裏にあり。

【飫肥城址】 高阜に據て築く、西南は酒谷川を帶び東北は山川の小流を控へ内城の前後に深隍を繞らし、追手門二重城戸後宮門等あり、伊東氏累世の居城たり、其始めは飫肥院の墟なりといふ、長祿年中島津忠昌、伊東祐國の强梁を憂ひ、其將新納忠續を此に居らしめたるを始めとす、爾來戰乱絕ゆる日なく、幾多の變遷を經て、伊東氏の有となりぬ。

【上城々墟】 飫肥町楠原にあり、酒谷川を隔てゝ飫肥城を對峙す、隍壘の迹猶存す、文明十七年閏三月伊東祐國一万六千の兵を率いて飫肥に出馬し、島津氏の領せし飫肥城を攻めし時之を築きて、本營となしぬ、其後伊東氏飫肥城を攻めし時此に屯せしこと屢なれども平時居守せし處にあらず今畦圃となる。

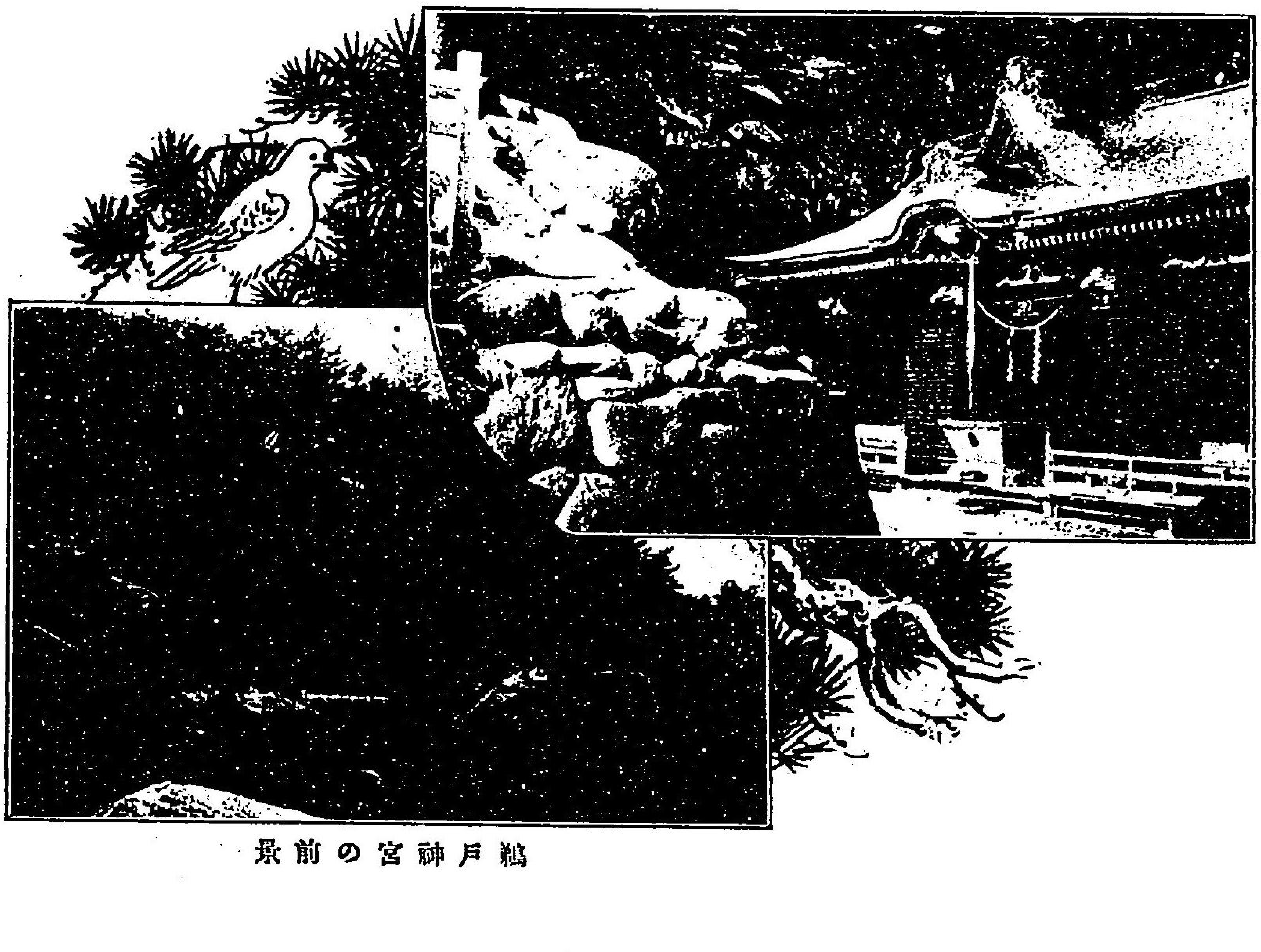
【伊東祐國墓】 飫肥町吉野方の永吉にあり、三層碣高五尺餘、文明十七年、祐國島津兵の爲めに殺さる、島津忠昌は祐國の女婿たり故に薩領の地に厚く葬る。

【吾平山陵】 油津の北なる山脈の嶺にあり、故老言傳ふ日本書記の吾平の山の上の陵とは

即ち之なりと、考證未だ正確ならず、文久三年此山に砲臺を築かむとて土石を拓きたるに鏡及び曲玉等を發見したりといふ、油津町堀川橋の西畔にある平野神社は舊稱乙姬大明神、或は云ふ吾平津姬を祭ると、或は云ふ景行天皇の妃八阪入姬を祭ると、明治八年舊八幡、春日、稻荷、妻萬の四社を分祭して今の名に改む。

【梅ヶ濱】 油津港より一坂を越え廣瀨川に至る海濱を梅ヶ濱と稱す、東は川を隔てゝ平山、風田の海濱に連る、風光絕佳、白沙青松相映じ大小の奇巖汀沙の間に列峙し、畫圖も及ばざる勝景の地なり、此濱の東端廣瀨川の終口に龍穴と稱する洞窟あり奇にして珍舟を浮べて望めば風景甚だ佳なり此邊夏期に至れば海水浴客甚だ多しと。

鵜戸神宮



鵜戸神宮の前景

榎原神社建立淵蒔子の像
今は境内に櫻井神社として祀らる

榎原神社（其一）

榎原神社（其二）

南那珂郡福島村中町小學校

福島村今町の景

福島上町　神戸孫太郎氏邸及ヒ商店

福島記

【概說】福島は宮崎縣日向國南那珂郡の南端に位し、東南海に臨み、西北山岳圍繞し、福島川の南岸に僻在する一小都市なり、氣候温和にして、海陸の諸產物に富み、殖產興業の前途頗る有望なるもの多し、殊に近時世運の發展に伴ひ、道路四方に開鑿せられ、各種の事業又た著しく增進せるを見る。

【沿革】欽明天皇の朝、土持氏に日向を賜ひ、世襲二百九十餘年に及びけるが、貞觀元年勅を奉じ參河に徙る、其後三百年は三田井家の管領に歸せしと雖、後保元二年再び土持氏に日向を賜ひければ、其支族此地に蔓延せりと云ふ、然れども福島の其化に從ひたるや否は、自然の地勢上眞僞甚だ疑はし。

其後郡司に尾張守是介あり、肝付氏輙ち是なり、爾來幾變遷、建武元年野邊兇盛地頭たり、其子盛忠に讓り、子孫相襲ぎ、政範、盛房、盛久、盛在、盛仁に至る、盛仁の子盛覺に至りて、島津氏の爲めに亡さる、因て島津豐後守忠朝之に代りしも、島津氏豐太閤に降りしを以て、一時此所に御倉所を建てゝ管領せしが、後秋月長門守種長に賜ひ、王政維新の當時まで之が所領たり。

因に福島は日向八院の一にして櫛間と稱せり、福島と呼ふに至れるは、何れの時代なるや推知するに難しと雖、金谷に奉祠する足利義照公へ、福島大明神の神號勅下あり、或は此時より改められたるならんか。

今や人文大に啓け、海陸相呼應して諸般の事業其緒に就き、各種の機關又た漸く完璧の域に達せんとしつゝあれば、商工業日に月に盛大となり、將來の繁榮期して俟つべきものあり。

【人情風俗】 土地海濱に臨み、漁貝の類頗る潤澤なれば、從來住民の多くは、勢ひ半農半漁の生計を營みたり、左れば言語風俗共に、簡易粗野なりしを免れずと雖、晩近文化の進運に隨ひ、漸次進歩改善されつゝあり、尙ほ約束を重んじ、義理に厚く、人情の敦かなるに至りては、容易に他府縣に見るを得ざる往時よりの美風たり。

【名勝古跡】 欽明天皇の朝以前に在ては、古考の資料に乏しく、又た史の據るべきもの殆ど皆無なりと雖、諸會長の巢窟にして、豪族諸所に割據せしは、穴居時代の遺物今尙は存在するに徵するも明なり、蓋し墓陵城跡の見るべきもの少なからざるも、これに因るならんか、以下其の重なるものを列記すべし。

▲蛇王社 奈留村上別府にあり、應安二年三月、櫛間地頭野邊盛房の建立する所なり、

社殿の後に穴居三個あり、其内部を窺ふに頗る宏大にして、大小の石器數多遺れり。

▲八床の穴 大束村市の瀬の上、福島川の涯側に在り、往時は其奥を究むる能はざりしも、今や穴中の岩層墜落し、僅に七十間に達するのみ、是れ亦た上古の穴居なりしと云ふ。

▲鬼ケ城 本城村崎田、永田の間、海岸に沿ひし原野に、巨石を以て造りたる窟あり、輙ち是れなり、規模擴大ならずと雖、頗る景勝の地たり。八床の穴と共に穴居の跡なりと傳ふ。

▲博變穴 鹿谷の奥に一穴あり、俗に博變穴といふ、蓋し昔時博徒の潛居せるを以て此名あり、南面して岡の側面にあり、谿流に臨みて冬季と雖、單衣裘を凌ぐに足る、果して上古のものなるや史の徵すべきものなきも、殊更近世に至り、戲れに穿てるものにはあらずと信ぜらる。

▲今霞野神社 圓形にして中央稍や細く、臥瓢の如き塚に奉祀す、其立側を檢するに礫を廻らし、土器の類破片となりて混入せり、又た附近の畑中に多くの塚あり、何人の墓陵なるや今俄に判明せずと雖、種々の神秘的口碑傳はれり、或は酋長守椽の墓陵ならんか。

▲「トバ」　都井宮浦にあり、三面小丘を以て繞らし、前面海に臨み、人家數戸あり、高さ六間面積三反餘にして岡の上に小祠あり、麓の住民之を祭して氏神となす、口碑の傳ふべきもの少なからずと雖略す。

▲「ケンコウ」　永田にある墓碑なり、五輪にして大なり、只だ梵字二三字を鐫れり、又た傍に十七八基の小五輪あり、年々參詣者多し、何人の墳墓なるやは未だ判明せず、口碑の傳ふる所によれば、吉田兼行の墓ならんと云ふも、史に徴するに兼行は加賀にて死し、勅命を以て其遺書等も收められあり、故に此口碑のみを以て、直に兼行の墓所なりと斷ずるは甚だ早計たるを免れず、或は兼行の支族此地に移りて死亡せしならんか。

【鵜戸神宮】　官幣大社鵜戸神宮は、南那珂郡鵜戸村大字宮浦に鎭座あり、祭神は日子波瀲武鸕鷀草葺不合命にして、相殿に天照大神、天忍穗耳命、日子火瓊々杵命、日子火出見命、神日本磐余彥命の五柱を合せ祀り、鵜戸六社大權現と稱す、本宮は南は海に斗出し、東に向ひて南北十六間、東西二十一間、高さ一丈八尺の窟内にして、即ち主神御降誕の靈地なり、前面は滄海渺茫として一點の眼に遮るものなく、奇岩怪石秀峙し、時に怒濤巖を拍ち、時ならぬ雪花の玉垣に散亂するあり、背後は命の御陵傳說地なる吾平山速日峯、高く聳えて絕勝の地なり、其創立は社殿に第十代崇神天皇の御宇と稱し、三十四代推古天皇の御宇

光喜坊快久勅命を稟り神殿再建、並に寺門建立、敕號を仁王護國寺と賜ふ、別當數十代奉仕、永祿三年領主伊東義祐社殿再興、仝伊東大和守祐實、寶永六年より仝八年に至り、社殿再興等の事あり、明治維新の際、權現號並に寺院を廢止し、鵜戸神社と稱へ、神職奉仕す、明治七年三月鵜戸神宮と改稱官幣小社に列し、仝廿八年十二月更に官幣大社に昇格し、勅使參向奉告祭を執行せり、神領は維新以前は田地方五百石にして、宮浦字吹ヶ井大浦百二十餘戸の土地人民共鵜戸領と稱し本宮の支配たり、現境內は十万四千四百餘坪に及べり。

【榎原神社】　鄕社榎原神社は南那珂郡榎原村橋之口に鎭座あり、万治元年戊戌十二月廿三日、仝郡鵜戸神宮の分靈を奉迎して祭祀せし神社にして、祭神は天照大神、天忍穗耳命、彥火瓊々杵命、彥火出見命、鸕鷀草葺不合命、神日本磐余彥命の六柱なり、又攝社に櫻井神社あり、寬文十年三月十六日を以て內田滿壽子の靈を祀る、今社藏の緣起及古記錄を按ずるに、滿壽子は元和六年日向國南那珂郡大束村の地に生る、父を內田外記といひ、素秋月氏の家臣なりしが、元和八年榎原村に移住せり、滿壽子幼少の時より鵜戸神社を信仰し、年廿一即ち寬永十七年庚辰九月八日鵜戸神社に參籠、翌九日歸途精神錯亂せし如く不思議に奇言を放ち、日を重ぬるに隨ひ不慮の事多く、或は政事を歎じ、宗敎を論じ、神曲を講明し、佛經を解釋する等人の意表に出で、讀書詠歌は更なり、書は一種の筆法を用ひて職

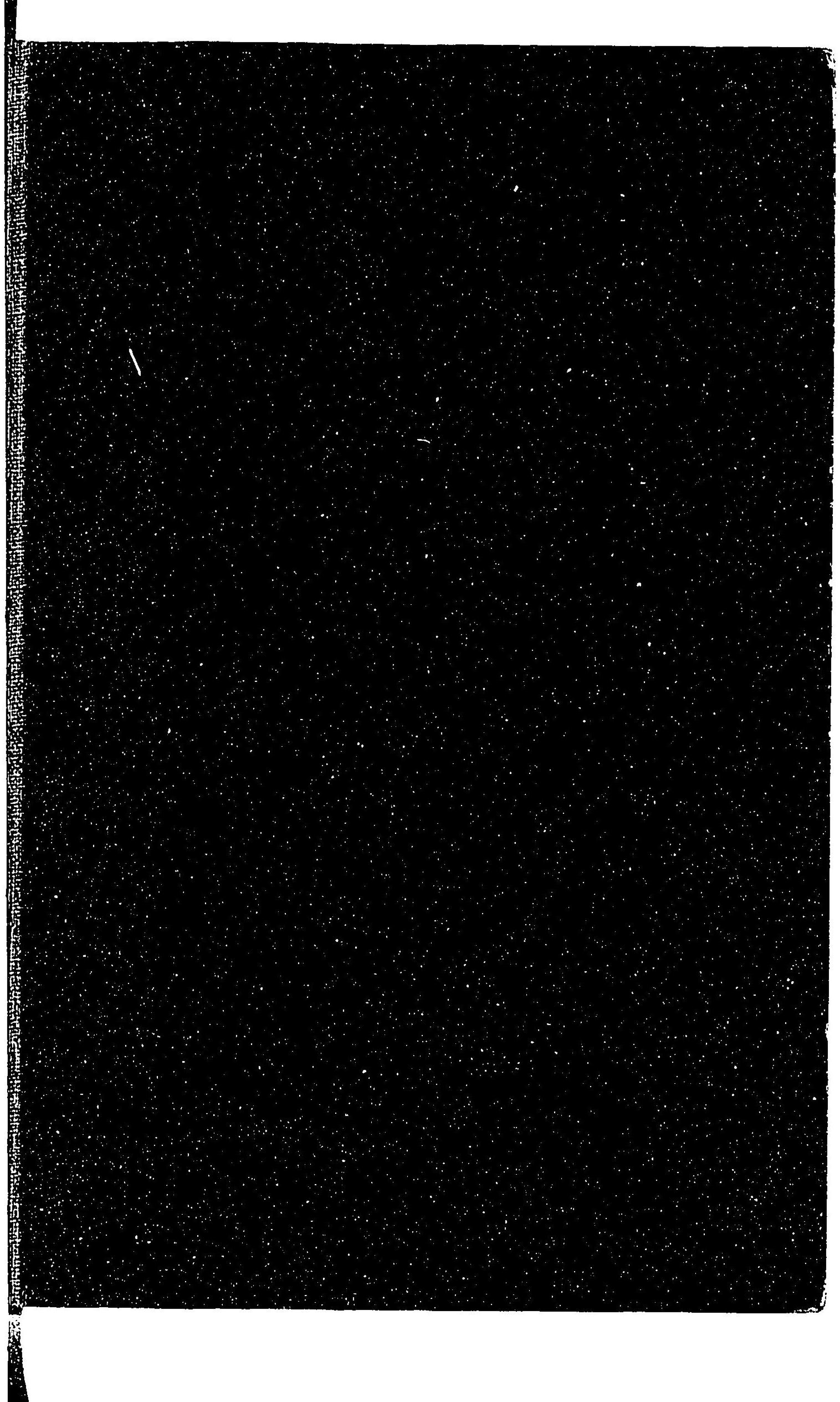
コ-4072
ち

も巧なり、世人之を稱して神女と云へり、斯くて滿壽子は明暦三年、藩主祐久に向ひ、『鵜戸神宮は天照大神以下神日本磐余彦命に至る六尊を奉祀せり、之汝の齋るべき神にあらず、必ず官幣の神社たるべし、然るに汝之れを奉祭するを得たるは汝が爲め最上の幸福にして、家門の榮譽なり、依て之を東西に奉祀し、厚く祭祀の禮を行ひ以て飫肥の鎭守となすべし』と、又曰『榎原は示現の靈地なり、依て此に祠を建つべし』と、此に於て万治元年祐久鵜戸神宮の分靈を迎へたり、滿壽子自ら奉祀し、社祿高三十八石を奉納せしむ、寛文三年三月十六日年五十二にして卒す、辭世に曰く

海原やよせくる涙の絶えせずは、末の世までも我ありと知れ

依て櫻井宮と謚し、其靈を榎原神社内に奉祀し、榎原櫻井神社として祿高六十三石を加増したり、尚滿壽子に關する種々の記錄は神通記其他數種ありて悉く仝社に奉藏しあり。

7-4072
5



332
262
Ⓜ

026335-000-1

332-262

都城誌

宗村 満夫／編

M45

ADC-4121